



発行日 令和2年3月(年1回発行)
発行元 東京潮陵梅中会
事務局 浦安市日の出1-3-22-406
南澤孝夫 方
Tel 080-5498-8305
e-mail info@choryo.org
HP http://www.choryo.org/

会長就任のご挨拶

【自己紹介】

皆さんこんにちは！令和元年6月8日、ちょうど65歳の誕生日に第14代会長を拝命いたしました。今日(ひょう)日出夫と申します。潮陵の制服を廃止したあの67期です。

手宮西小⇒北山中⇒長橋中⇒潮陵高⇒国家公務員(税務)⇒監査法人(現在) ざっとこんな人生を送っています。7人兄弟の6男坊、バッチです。育ての親が4男で現在も長橋にいるため、年に1~2回は小樽に帰り、美国から積丹半島沖に出て好きな釣りや沖縄時代(2年間)に取得した船舶1級免許で船の操縦も楽しんでいます。

私と会のご縁は平成4年当時、たまたま同じ部署に後輩がいて「潮陵のOB会があるらしいけど一緒にどうですか」と誘われたのがきっかけでした。初参加の印象は年配者が多く場違いな感じもしましたが、運よく同じ部活(軟式テニス)の先輩がいたので知らない人ともすぐに打ち解けることができ、今に至っています。

【当番幹事の期】

そこで「40歳が当番幹事の期だよ」と言われ、なんとか同期と連絡を取り合って当番期の任務を果たしたことが67期同期会の原点にもなっています。



写真は、皆様よく知っている極楽とんぼの加藤浩次(本名:浩二)さんです。(向かって右が私です。)

私が事務局長のとき、現在の副会長で82期の柳原文さんから当番期として「新年交礼会」の企画提案がありました。それは「星先生」を囲む

会でした。星先生には大変お世話になったので、同期とその前後の期に声をかけるので是非やらせてほしいとのことでした。

結果は当番期の前後を含め、初めての参加者が10名を超え、星先生との再会を喜び近況報告など大成功となりました。2次会には超多忙にもかかわらず星先生に会いたいと顔を出したのが加藤さんです。加藤さんも当番期の82期で、柳原さんとは松ヶ枝中学時代から一緒だったということで声をかけていたものです。



皆さんも当番期のときは、同期を誘って参加しませんか。新しい企画提案も大歓迎です。

なお、現在の当番幹事は40歳に加え、60歳にもお願いすることに変更しています。

【会の現状】

写真から10年が経ってしまいました。最近の会は、初めての参加者はいても、なかなか2度目の無い、ほぼ同じメンバーの会となっています。横軸の各期同期会は盛大に行われているものの、縦軸の先輩後輩との繋がりが希薄のためと思います。集まってもメリットがないと聞きます。しかし、過去にはセイコーエプソンの社長で当時副会長であった安川英昭さん

の「インクジェットプリンター開発秘話」や、一昨年の美人過ぎる弁護士で検索すると出る亀石倫子さんの「刑事弁護人となった私」など、様々な分野で活躍する同窓生の興味深い講演もあるのです。

小樽中学や潮陵高校出身者は、いろいろな職業に就かれています。現に当会の創立 60 周年記念「潮陵」会報 14 号で在校生向けの OB・OG アンケートを実施したところ、62 名の方々から回答があり、様々な人生と職業の経験を披露していただきました。

このように、同窓会には、様々な年代の様々な人生経験をもった方々と知り合い、刺激を受ける機会が多くあります。

実際に集まる会は、1 年間の報告・予算を決める 6 月の「定時総会及び新会員歓迎会」と忘年会の意味の同釜会(おなかまかい)の年 2 回です。会報誌の発行は原則年 2 回ですが、最近は 1 回に凝縮しています。参加者が少ないと言いましたが、寄稿文に協力してくれる方、毎回、会報で近況報告をしてくださる方は 60 名を超えています。また、多くの方が会報を楽しみに待っています。

【4 つのお願い】

潮陵を卒業して大学に行き、その後就職をして家族を養ってと、とても時間がないと思っている方が多いのは当然です。しかし、各期の同期会は行われているはずですが、同世代の意見を当会に知らせるため代表者(常任幹事)を送り込んでいただきたいのが 1 つ目のお願いです。各期によって当会に求めることが何かを知りたいのです。

当番幹事の部分で書きましたが、皆様の要望があれば現校長先生のみならずお世話になった先生等をご招待して当時を語れることも可能です。毎年違う先生にお出でいただき、旧交を温めることもできます。是非代表者を推薦してください。

2 つ目のお願いです。

6 月の「定時総会及び新会員歓迎会」は、予算決算報告等の決議以外、潮陵 OB・OG の講演会や催しごとを行って懇親の輪を広げています。もちろん、料理・飲食付です。2 次会で同期会も出来ます。

一昨年の亀石さんに続き、昨年は北海道(札幌・小樽)で活躍中の 71 期の柴田剛さん(ダンディ柴田;あまとう)にお笑いを含め小樽や潮陵時代の話で盛り上げていただきました。

このように定時総会や潮陵在校生に向けた講演や寄稿文で協力してくれる方を探しています。自薦・他薦を問いませんので同窓の人に是非自分の思いを披露してください。



また、「定時総会及び新会員歓迎会」での景品やお土産の寄贈も是非是非お願い申し上げます。

3 つ目です。

先生をお呼びするには費用が掛かります。また、会報にも費用が掛かります。会の意思決定をする常任幹事会を開くのにも費用が掛かります。

毎回、会報やホームページに記載しておりますが、会費の納入にご協力をお願いできれば幸いです。会の存続には一番必要なものですので是非よろしくお願いいたします。

4 つ目、最後のお願いです。

個人情報保護法の影響で、東京近郊に住む同窓生の情報が不足しています。とくに、若い同窓生の情報が集まりません。どうぞ皆様、潮陵を卒業された兄弟姉妹・ご子息等が東京近郊にお住まいでしたら、東京潮陵樽中会のホームページ等をご覧になって当会に 1 度参加されるようにお声をかけていただけたら幸いです。よろしくお願いいたします。

東京には他に「東京小樽会」という小樽に在住・在勤したことのある方なら誰でも入れる会もあります。参加者の年齢構成は若干高めですが常時 100 名を超える羨ましい会となっており、今後はそちらとも連携を取って当会を活発にさせていければと思います。

もちろん、小樽の本体である「潮陵倶楽部」と親密な関係を持ち、連絡を密に協調した活動も行います。

今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

蛇足ですが、元マルサの男の話も聞きたくないですか？(今ちゃんより)

東京潮陵樽中会会長
今日出夫 (67 期)

会長退任のご挨拶

おかげさまで、今 新会長に引き継ぐことができました。在任中、これまでご支援いただき、ありがとうございます。

長年、東京潮陵樽中会の運営に携わり、同窓会事業の全国的な先細りを感じていました。何とか新たな何かを模索の日々でした。

まずは、若者の参加を少しずつ進めるべく、個人情報保護法の影響で同窓会名簿が手に入らなくなった現在、「潮陵の新入生対面式」の異常な歓迎を思い出し、歓迎から始める形式で、総会を開催しました。新入会員の歓迎の意味合いで会費¥1,000。総会のたびに毎回毎回数人ずつ新会員は増えましたが、若者の継続的出席者はとても少なく、中高年で新入会者が一部定着していただいています。しかし、ある年齢に達したときに東京潮陵樽中会に久振りに出席を願って継続的普及をしなければならないことと考えています。

これまで支援していただき、出席して戴いていた交流に積極的な方々をベースにして、新たな OB&OG の方々の集客を目指しました。同窓生 同窓会に関わる中で、先輩たちの社会での活動に触れる機会が多くありました。その中で、いろいろな経験やスキルをお持ちの方がたくさん居られ、そのエネルギーや社会の息吹を本校在校生に直接伝達支援する方法を模索して、60 周年事業として、アンケートと出前公演を実施しました。ここで、大きな成果は、これまで総会や宴席には参加していただけなかった方々から、アンケートで数多くの参加が得られた事です。同窓会メンバーとして、在校生支援に興味を持たれてい

る人が多く存在することが確認できました。

新会長の今君を中心に、親睦の会としてさらなる継続を期待しています。私も、一会員として、サポートしていこうと考えております。

私は、現在、大学院で多文化共生プログラムの開発を行っていますが、日本人と外国人の文化格差同様に、一緒に活動しているグループの世代文化格差も同様な問題点があると考えています。

ホフステードの研究では、日本人は、世界で稀に「不確実性の回避」を行う国民で、自分のグループと違う人の受け入れや新しいものの導入などを拒否する傾向がとても強い国民のようです。島国や鎖国に原因があるのでしょうか？このことを解消するには、「単純接触効果」を活用して、とにかく会う事で、文化の違いの認識をするカルチャーショックの時期に、他文化許容度が互いに増す機会の増大を図ることが重要との結論になりました。「単純接触効果」は、会えば会うほど嫌いなものでも好きになるザイアンス効果とも言われています。いかに、会う機会を作るか、多いほうがとにかく効果があることが確認されています。



また会で、お待ちしております。

佐々島 宏 (65 期)

寄稿 創業 20 年たって、60 歳を前に後輩に伝えたいこと

和田 一男 74 期

平成も令和に変わり、気が付けば60歳目前。会社を創業して20周年になります。今回、同窓の皆様に向けて、寄稿する機会を頂きました。現役を続けている身でいささか早計かと思いますが、自分の半生を振り返り、後輩へのメッセージを送りたいと思います。

<サッカー一筋>

高校の会報ですので、高校時代から振り返るべきですが、高校時代はサッカー部一色。全てを部

活に注いでおりました。当然、サッカー部9代目主将としてチームを率いる経験もさせていただきました。ただ、根がまじめというか、一本気な性格な故、チームをまとめきれず、悔しい気持ちの残る3年間でした。しかし、未消化感もあり、大学でも4年間、体育会サッカー部一筋の生活を送ります。大学の体育会組織を通じて、個人より組織の目標達成、上下関係、仲間の大切さ、努力は裏切らない真理を徹底的に叩き込まれます。お陰様で卒業後35年

たちますが、いまだに当時の先輩、仲間たちとは年に数回酒を酌み交わし、昔話、人生論で盛り上がっています。先輩後輩のつながりをとても大切と思いい、現在は、60年近く歴史ある小樽商科大学体育会サッカー部のOB会会長を務めています。サッカーは、その後も社会人となっても続け、44歳になるまで、東京都リーグ2部で現役を続けました。

<ハイプレッシャーな会社、リクルート時代>

大学卒業後就職で選んだ会社がリクルート。東京で営業職に就きました。全国から偏差値の高い、優秀で個性の強い同期社員が500名、同じスタートラインにつきます。当時リクルートは競争の激しい、ハイプレッシャーな社風で有名でした。その中で全国トップを何度も取り、マネジャー時代も通期全国優秀経営者を複数回受賞できたのも、実はサッカー部の経験から得られたものが大きかったです。入社時から激しい競争、プレッシャー、体力のきつさは体育会の辛さに比べれば、楽なものと感じられました。田舎の大学から出てきた偏差値の低さや人脈の狭さは「逆境を努力と根性」で乗り越えます。人より多くの仕事をし、苦勞を受け止め経験を積み上げ、実力をつけてきました。いささか古いとお感じでしょうが、人材育成、キャリア開発のコンサルティングをやっている経験からしても普遍的論理なのです。(逆に今の若い人たちの仕事観が将来のキャリアを考える上でとても心配です。)組織人15年間、仕事一筋で考え抜いてきたからこそ、結果に結びつけてこられたキャリアなのです。その自負があったからこそ、独立の道を選択します。

<試行錯誤の20年間>

多くの期待を背負いながら、そのプレッシャーと対峙してきた15年間。妙な自信があり、39歳の時に「お客様の本当に役に立つコンサルティングサービス」を提供したいと思い、独立します。そこからは右も左もわからない(前例のない)、コンサルティングの世界。試行錯誤しながらも、猛烈に勉強して何とか乗り越えてきました。妙な自信は打ち砕かれ、頼ったのは、高校、大学、リクルートOB、先輩たち。先輩たちの助けを借りながら、何とか切り開いてきました。(前会長の佐々島さんには本当にお世話になりました。)この20年間続けてくることができ学んだことは、

人脈の大切さ

誠実な姿勢と謙虚な気持ち

努力(学び)を継続、進化し続けること

<60歳以降考えていること>

自分は独立して20年かけて、独自性あるソリューションと実績を築いてきました。今最も欲していることは「株式会社ブレインパートナー」という会社の事業継承です。会社と事業を継いでくれる人を探しています。その方に、2020年以降迫り来るであろう、本格的な大不況期への対応として、多くの経営者を支援してほしいと願います。自分自身もまだまだ若さを維持し、次世代経営者を支えながら70歳くらいまで現役で仕事したいと思っています。そして、先輩から授けられたご恩を、今度は私が後輩のために提供したいと考えています。リクルートOB会では副会長をしています。この東京潮陵樽中会も含め、後輩を支援する様々な社会活動の場がこれからも待っています。

今年59歳になります。2020年度から東京都シニアサッカーリーグ1部のチームで公式戦のグラウンドに立つことになりました。また戦いの場に向かえることにワクワクしています。皆さんも年老いてからも本気で楽しめる趣味?仲間を、継続して大切にしていきましょう。



サッカー部初代主将佐々島さんとのサッカーと飲み会

2019年11月に65才になったのと同時に東京潮陵樽中会から寄稿の依頼があり、人生の棚卸しをする良い機会と考え引き受けることにした。

私は小樽で育ち、現在は東京の文京区本郷にある小規模大学で人的資源管理等の科目を教えている。日本の経済成長と共に青春時代、国連勤務時代、大学教員時代を過ごし2020年3月末に定年退職を迎える。私のマイノリティとして生きた人生に少しの時間、お付き合い頂ければ幸いである。

第1章 小樽で育つ

私は中央バス(株)に勤務するサラリーマンの父と専業主婦の母の元に長橋十字街の近くで生まれた。祖父を加え7人家族であった。現在、7人家族は大家族であるが、当時としては比較的普通の家族構成であった。

私は4人姉妹の末っ子としてのんびりと育てられた。父が私の誕生後、札幌市、その後虻田郡倶知安町近くの磯谷郡蘭越町に転勤し、私が小学校5年時に家族は小樽に戻る。その後大学を卒業しアメリカに留学するまで小樽で生活した。それ故、私は今でも道産子であり私のふるさとは小樽であると自負している。

蘭越町での子供時代はのんびりとしたものであった。小樽市立富岡小学校に5年次に編入した時には、クラスの同級生が皆賢く見えた。西陵中学校を経て、すぐ上の姉が小樽潮陵高校に進学していたという理由で潮陵高校に進学する。

私のキャリア人生を考えるうえで特筆すべきは、10代後半に私の周りで起きた3つの事柄である。

第1は入院生活である。高校2年次に体育の授業時に平行棒から落下、それが原因で椎間板ヘルニアになり小樽病院に約2ヵ月入院した。症状が重く、担当医は両親に一生車椅子の生活になるかもしれないと宣告していたようだ。牽引により症状は改善したが、退院したのは前期試験の1週間前であった。クラスメートがノートを貸してくれ、必死に要点を覚えた。予想していたより点数が高かったとのことで、担任が留年ではなく3年次に進級する措置を取ってくれた。春休み期間、出席日数を満たす為に毎日登校した。高校の寛大な対応に感謝する。

高校では3年間同じクラスだった仲の良かった友

人が現役で北海道大学文類に進学した。大学受験に際し、親からは北海道内の大学に進学して欲しいと言われていた。私は一年浪人し、北海道大学文類に進学した。

第2は1972年に開催された冬季札幌オリンピックの観戦である。応募した90m級ジャンプ競技のチケットが当たり、すぐ上の姉と競技を見に行った。それまで外国人と接する機会はそれほど多くなかった。外国船が入港した時に都通りで外国人を見かけたり、富岡町にあった我家にモルモン教の教会の宣教師が勧誘に來たりした程度であった。競技会場で見た外国人は長身でブロンド髪、毛皮のコートを着たエキゾチックな風貌であった。これが実質的に私の異文化との初めての出会いであった。

第3は入学後2ヵ月後に父親が心筋梗塞で亡くなったことである。父親は54才であった。両親は老後に備え長橋に店舗とアパートを建てていたが、もらい火で一帯16軒が消失した。我家は家の大黒柱と不動産を失う。母は働いた経験のない人であったが、市から低金利の助成を受け店舗とアパートを新築し生活基盤の立て直しを行った。

私の場合、闘病生活が目の中の事柄に一生懸命取り組むことを教えてくれ、札幌オリンピックが夢を追うきっかけを作り、我が家の再建が私に自立して生きることを教えてくれたように思う。

第2章 米国留学、国連で働く

大学3年次に経済学部に進学した。経済学部の国費留学制度に応募したが不合格の通知が届いた。それからしばらくして、廊下である教授から声をかけられ、ロータリー財団の留学試験を受験することを勧められる。国費留学試験の選考は激戦で、もう一歩のところだったと伝えられた。ロータリー財団の試験を受験し、合格する。大学卒業後、インディアナ州立大学大学院経営管理研究科に進学し、2年後経営学修士(MBA)を取得する。留学中は夜中の12時迄図書館で勉強した。その後の人生や仕事上で苦しい時には、アメリカの大学院であれだけ頑張れたのだから、この苦労も乗り越えることができるはずだと自分を鼓舞したものである。

2年後に修士号の学位を取得した。青春の夢であったアメリカ留学も果たした。帰国し職探しを始めた

が、札幌にも東京にも私を雇ってくれる会社はなかった。MBAを持っている女性を部下に持ちたい上司はいない、と言われた。

職探しに上京した際、外務省に立ち寄り若手国際公務員について可能性を尋ねると、応募を勧められた。締切が当日と知らされ、宿泊先のホテルのタイプライターを借り、応募用紙を作成し、夜中に投函した。

1982年2月に若手日本人準専門家としてILO(国際労働機関)ジュネーブ本部に着任する。着任した部署は緊急雇用対策部であった。この部署はアジア、アフリカ地域の所得創出を目的に公共事業を実施し、労働の対価に賃金を現地人に支払うというものである。開発途上国にODA(政府開発援助)という形で開発途上国政府を援助するよりも、現地の人々に労働の機会を提供し、賃金収入の機会を与えるという仕組みであった。当時は一生懸命、支援国政府向けに報告書を作成した。課長はフランス人、係長はインド人、直属の上司はベルギー人であった。この間、インド、タイへの出張に同行した際、インド人上司がインディラ・ガンジー元首相宅を訪問し、同行する。私宅はこぢんまりとした家で、元首相も小柄のチャーミングな女性であった。

1年半過ぎた頃、拠出国(ドナー国)が資金提供を停止し、部署は資金難に陥った。上司からこのような状況の下で、雇用継続はないと通告される。どうしようかと思案していると、ジュネーブに本部を置くUNHCR(国連難民高等弁務官事務所)のアフリカ局が若手職員を探しているという。面接試験を受け合格し、東アフリカ局に配属される。今でこそ緒方貞子さんが高等弁務官になったことでUNHCRの名称は日本で広く知られているが、私が勤務した時期は1983-1985年で緒方さんが赴任する数年前である。日本でUNHCRの活動を理解している人はほとんどいなかった。職場の課長はタンザニア人、直属の上司はインド人、アシスタントはカメルーン人とスリランカ人で国際色豊かな職場だった。

UNHCRにはローテーション・ポリシー(定期転勤制度)があり、私の契約更新は、途上国勤務が条件であった。アフリカ東部に位置するソマリア事務所長が首都のモガデシュで働かないかと誘ってくれた。思案している時、ソマリアからのテレックスに国連職員がソマリアの国連ビーチで泳いでいてサメに襲われ、死亡したとの報告があった。国連ビーチはネットに囲まれているが、穴がありサメはその穴をつき破って侵

入したとあった。ソマリア行きは辞退した。次にスーダン事務所、ウガンダ事務所での仕事を提示された。イスラム教のスーダンで女性が働くのは困難を伴う。ウガンダの首都カンパラの宿舎のまわりには鉄条網が張り巡らされ、ガードが家を警備するという。

心が動かずどうしようかと考えていた時、日本政府代表部からFAO(国連食糧農業機関)ローマ本部が管理部門で人事統計ができる人材を探しているという連絡を受けた。UNHCRで人事ロスターを作成し、重宝がられたことが評価されたようだ。面接試験を受け合格し、ローマで働くことにする。FAOの当時のトップはレバノン人で、中東出身の職員が幅を利かせていた。人事部長はチェルノブイリ人、係長、直属の上司はアメリカ人であった。私は人事部に所属し各種人事統計資料の作成、官房(トップ・マネジメント)向けに各種人事資料の作成を担当した。赴任当時はパソコンが普及する前でメインフレームと呼ばれる大型コンピュータを使っていた。ただ単純計算だとソロバンを使った方が早いので、イギリス人のアシスタントに英語で数字を読み上げてもらい、数字の確認を行ったりした。ある時ソロバンを使い検算していたら、通りかかった銀行出身の財務部のアメリカ人が足を止め、ソロバンは以前から知っていたが実際に使っているのを初めて見たといたく感心された。

日本人の緻密さで作成した資料は官房に高く評価された。ある日、事務局長室の秘書から連絡があり、事務局長(最高責任者)室を訪問するよう連絡があった。事務局長はあなたが着任してから人事部が作成する資料が信頼できるようになった、と褒めてくれた。昇進させたいので、希望する赴任国はあるかと私に尋ねた。その時は、現職のままで良い、転勤は希望しないと返答した。

実はその一年程前にアメリカ政府がFAOへの分担金の支払い停止を宣言した際、私は極秘裏に職員のリストラ人数に見合う年齢、雇用年数、国籍、職位等の条件のシミュレーションを命ぜられ、作成していた。このリストラ資料は施行直前にアメリカ政府が分担金を支払ったので使用されることはなかったが、この特命を機に自分の母国に戻りたいという思いが芽生えていた。

日本に戻り働きたいと考え、FAOに働く先輩の日本人女性に相談すると、広い人脈を持つ日本人が近くローマを訪問する予定であるから紹介してあげると約束してくれた。私が帰国したいと考えており、職場を探しているとその人に伝えると、民間企業は勧めら

れない、大学が良いのではとおっしゃった。何か良いNewsがあれば伝えると言われる。2年くらい経った頃、日本の短大が大学を新設するので専任教員を探している、興味はあるかと打診された。日本に戻る機会は多くないと考え、話を繋いでもらう。職場の外国人の同僚達は女性の地位の低い日本に戻ることに反対したが、帰国することを決心した。1990年3月末にフィンランドのヘルシンキ、ロシアのモスクワ経由で帰国した。

第3章 大学で働く

1990年4月からの2年間は短大に所属し、その後1992年の開校時に創設時のメンバーの一人として東洋学園大学に就職した。その後30年間、同じ大学に勤務し、2020年3月に65才で定年退職を迎える。大学在職時の私なりの思い出を伝えたい。

・カンボジアでの民主化支援

日本に戻り自分のキャリアで欠けているのは開発途上国での勤務であると考え、外務省に当時新聞等で取り上げられていたカンボジアでのUNTAC(国連カンボジア暫定統治機構)への支援について問い合わせたところ、国連ボランティアの仕事ならあると伝えられた。大学が在外研修の形を取ってくれた。カンボジア滞在中、日本人国連ボランティアの中田厚仁さんが殺害された際には、私が日本から来た家族の世話や葬儀を取り仕切った。この時は国連の仕事を知っている自分が現場にいて本当に良かったと思った。

・研究者としての書籍の執筆

大学に勤務しながら隙間の時間を見つけ本を出版した。最初の著書は岩波ブックレット『国連ボランティアをめざす人へ』、2009年にはペリカン社から『国際公務員になるには』を出版した。この本は類書がないとのことで長く読み継がれ2020年9月に改訂3版が出版される予定である。

子供が中学校に入学し子育てが一段落したところから専門書を刊行したいと考えるようになった。2011年に白桃書房から『国際公務員のキャリアデザイン』を出版する。この本(論文)に対し京都大学から博士号(経済学)を授与された。その後は東南アジア7ヶ国で起業している日本人経営者51名をインタビューし、分析研究を行ったTransnational Entrepreneurship in South East Asiaをイギリス人の同僚とSpringer社から2019年9月に出版した。このeBookは<https://link.springer.com/book/10.1007/978-981-3>

2-9252-9から無料でダウンロードすることができる。

・仕事と子育ての両立

女性が仕事を継続できるか否かは子供が健康であるか否かである。私は晩婚で40才の時に出産した。現在は40才を超えて出産する女性も多いが、25年前は高齢でハイリスク出産と言われた。医療の進歩は目覚ましい。

自分が仕事を続けてこられたのは大学での教員の時間管理が本人に任されていたこと、子供が健康であったことに尽きる。女性が仕事を継続することは簡単ではない。

・管理職の仕事

勤務校では最初人文学部に所属していたが、大学が経営学部、大学院を新設したことを契機に所属が経営学部になり、専門課程で人的資源管理等の科目を担当する。現在では女性教員が増えてきたが、長い間、経営学部の専門課程、大学院で、私は唯一の女性教員であった。2016年に同僚たちが私に大学院の研究科長(Dean)になってほしいと言いだした。研究科長になりたい人はいるが、その人たちになってほしくないというのが私を推薦する理由であった。今まで大学にお世話になってきたという思いもあり、管理職を引き受けることにした。管理職は多忙を極めるが、一教員として見ていた職場の景色とは異なる職場の景色を見ることができた。後輩女性には機会が巡ってきたら逃げずに管理職に挑戦してほしい。

・国際交流

大学院の創設10周年記念事業として2018年にネパールのKing's Collegeの大学院生5名を勤務校に招き、本学の大学院生との学術・文化交流を企画した。2019年にも引き続きネパールの学生達が勤務校を訪問し、共同研究と文化交流を行った。2020年3月には勤務校の大学院生がKing's Collegeを訪問する。私が日本の学生を引率する予定であり、これが私の定年退職前の大仕事になる。このプロジェクトは私がネパールで開催された国際学会で研究発表を行った際にKing's Collegeの学長と出会ったことが契機となった。出会い、縁は大切である。

第4章 マイノリティの人生を愉しむ

ふり返ると私は、大学でも、勤務した国連、大学でもマイノリティであった。

高校時代はクラス40人の内女性は10名。北海道大

学経済学部では一学年160名の内女性は5名のみであった。女子学生は大学3年時の終りに大学事務室に呼ばれ、女子学生は公務員・教職の試験を通じ、自助努力で仕事を見つけてほしいと通告された。雇用機会均等法が施行される10年程前のことである。

国連ではアジア人で専門職に就いている女性は少なかった。ILOに勤務していた時、アポイントをとり他部署のフランス人課長を訪問すると、来客の予定があると取り合ってくれなかった。私が本人であると告げると、明日訪問してほしいという。次の日は礼儀正しく対応してくれた。たぶん私をアジア出身の事務職員と間違えたのだろう。

アメリカの経営学の研究者スパー(1980)のライフステージ理論によると、人生の探索期(15歳~25歳)での経験がその後の人生に影響を与えるという。私の場合は冬季札幌オリンピックが与えた影響が大きいと思う。今年開催される東京オリンピック・パラリンピックを観戦する若者の中から海外に目を向ける人材が育ってほしい。

最後に私の家族について触れたい。開発経済学を学んだ娘は現在、アメリカのワシントンD.C.で開発コンサルタントとして働いている。夫は入院中に起きた事故の後遺症から介護が必要となり、現在は自宅近くの介護ホームで生活している。定年退職後には夫と過ごす時間が増えることを楽しみにしている。



インディラ・ガンジー首相私邸を訪問



マッターホルン登頂後



国連創設 40 周年記念ミサで日本人職員代表としてバチカンでヨハネ・パウロ 2 世(ローマ教皇)に謁見



2019 年 11 月に学会発表でベルリン市訪問
ブランデンブルク門にて

1. 第3ステージに足を踏み入れて

2017年に帰国。その当時勤務していたベトナムのホーチミンにある日本語学校での5年7カ月の役割を終えての帰国である。それは約43年間にわたるビジネス生活との決別であり、家族とともに迎える第3ステージの始まりでもあった。

43年間の大半が、幾度かの海外単身赴任や出張を含め外に没頭した生活だった。その分、内のことを任せっきりにされていた家内の負担は相当のものだったことを理解する今日この頃の自分である。

せめてもの償いというわけではないが、同居している長女とともに家内の負担を少しでも軽くし、実り多き時間を作れるよう努めている毎日である。

私は、かつて「弾丸少年」と呼ばれていた。大学の山岳部の仲間がつけたものと記憶している。今は「弾丸爺(じじい)」に成り下がっているが、良くも悪くもこの呼び名が好きで、自身の幾多のグローバル体験には不可欠なゆえんだと思っている。

2. 大学生活そしてオイルショック直後にあった大きな転機

18年間の小樽の生活から東京の大学へ入学するために内地に向かったのもグローバル人生の第一歩だったと思う。親戚も知人もいない東京で全国から集まってきた人たちと良い関係を築くためには、相手を理解し、自ら発信して行く事が大切だ。困ったら助け合う、行き違いがあっても相対して話し合う、うれしいことも悲しいことも共感しあう、そんな学生生活だった。

大学入学直後に父がなくなり、実家も札幌に移ったこともあり、故郷を振り返ることもなく東京の新生活にどっぷりつかっていた。

大学の4年間は保健体育の教員になるための勉強はもちろん、それ以上に山岳部の活動にのめり込み「弾丸少年」を磨き上げることになった。

山岳部OB中心にヒマラヤ遠征隊が組織され 6人のメンバーのうち唯一の現役として加わり、準備活動を共にした。その時は教員採用試験の準備も同時進行だった。北海道の試験だったので、卒業後は北海道に帰るつもりで そのときは遠征隊メンバーからもおのずと手を引くことになると考えていた。

採用試験には合格し、複雑な気持ちで4年生の後期を過ごしていた。

大きな転機は1975年3月にもらった教育委員会からの一通のハガキだった。『今年度は、採用困難につき自宅待機されたし』

今思うと、熱心な採用活動を行ったり、非常勤講師としてのアプローチや一年間留年することで仕切り直す選択もあったはず。

自身で選んだ道は「大学を4年で卒業すること」「ヒマラヤ遠征に全力を注ぐこと」であった。

3. 初めての海外渡航はパキスタンだった

大学卒業後はヒマラヤ遠征の準備活動、資金稼ぎのアルバイトに専念。そして1975年7月15日、我がチーム6人はカラコルム山脈にある未登峰を目指してパキスタンに向け出発した。

当時のパキスタンは印パ紛争が休戦中だったのと、ネパールに比べて大幅に日数が短縮できる、そして日本との関係も円満などのメリットがあった。

翌年に「ソ連のアフガニスタン侵攻」、その後「タリバン勢力の勃興によるテロの勃発」など治安が大幅に悪化したことをみても奇跡のような一時期だった。

遠征活動は8月下旬まで続けられたが、「登山許可を得るのに時間を要したこと」「高山病、下痢などの体調不良」「豪雨による道路の決壊」などアクシデントが重なり、未登峰征服までには至らなかった。

それでも数多くの体験や情報はこの後に続く数多くの遠征隊に生かされている。そして、6人のメンバーは40数年経った今も交流が続いている。

8月末で遠征隊は解散し、唯一私だけが日本に戻ってもすぐにやることなしと現地に残り、お金が尽きるまで旅を続けることになる。

ラホール～カラチ～(アラビア海)～ペシャワール、そしてアフガニスタンに向かう途中の検閲でチェックされた。滞在期限をオーバーしていたのだ。一人旅を続けて一か月経ったところだ。

旅の前半は見るもの全てが目新しく、イスラム文化をものともしない好奇心、不安をかき消す向こう見ずさ、そして頑強な体力などで楽しさに満ち溢れた毎日。

旅半ばに「モヘンジョダロの遺跡」を抜け「インダス川」のそばで川面を眺めていたら『いつまでこんな生

活を続けているんだ』『日本に帰ったら何をやるんだ』という声が聞こえてきた。エキサイティングからアンニュイへの変わり目だった。

それでも先の見えない不安を打ち消すように『別の国に行ってみよう』と空元気で自分を鼓舞した。結果、アフガニスタンには入国できず、帰国を余儀なくされた。今思うと「見知らぬ国で屍にならなくて良かった」と安堵している。

これを契機に学生気分を決別し、本格的に生活そのものを考えることになった。

日本に戻った後、とにかく生活の礎を築こうと就職活動に専心した。独り立ちのためには「教師だ会社員だ」などとはいつていられない。そして、その年1975年11月15日『大手スーパーS』に入社した。

4. 大手スーパーSで学んだこと（第1ステージ）

(1) 日本と中国人社会との文化の違い

2007年11月、私は32年間勤務した『S』を早期退職した。当初は当座の居場所程度としか考えていなかったものの、仕事での失敗や成功を繰り返すうちに会社の文化にはまり込んだこと、また早い内に結婚し家庭をもったこともあって長く続いたと思っている。小売業メインの会社だが、店舗勤務はもちろん人事部、テナント管理、消費者室と職種は多岐にわたり、好奇心を満たすばかりでなく、キャリアの積み重ねにも役立った。

とりわけ1988年からの国際事業部での10年間は我がグローバル人生の中核ともいえる期間だった。香港での現地赴任を始めシンガポール、北京、バンコクなど中国文化の国で仕事を重ねてきた。店舗自体を作り、運営のシステムを作り、現地の人たちを教育し、オペレーションできる店を開店させる仕事である。お客様である現地の人に支持される店を作らなければならない。売れる商品を海外で作って日本に輸出する商品事業とは異なり、現地の文化の違いを理解することが事業の成否に直結する。

今の時代にも通じる文化の違いを表にまとめてみた。全て実体験を経たものである。また当時の日本と今の日本との変化も見取れる。

項目	(当時の)日本人	中国系の人たち
1. 会社への帰属意識	高い。会社を第一義に考え、定年まで同じ会社に勤めたい	高くない。公私のけじめは明解。条件が良ければ移りたい

2. 仕事と家庭	仕事や会社最優先、家庭は二の次。単身赴任も辞さず	家庭や家族最優先。勤務時間以外は家族や友人との時間。単身赴任、長期出張は不可
3. 昇進・昇格	社員全員に昇進昇格の機会あり 販売員から経営幹部登用もあり	学歴や専門性で給料が決まっており、販売員から社長はありえない 多くが独立して社長を目指す
4. 社内教育	しつけマナーも含め教育レベルが整っている。仕事の対応力や応用力が期待できる。先輩が後輩に教える風土がある	指示されたこと以外はやらない。契約や指示書がないと動かない。教育や知識は自分の財産、他人に教えることはしない
5. 労務管理	行動の良し悪しの倫理観は備わっている。性善説結果だけでなくプロセスやチームワークも重要視する 管理スタッフが売場応援をすることがある	不正や間違いを防ぐシステムやルール作りが必須。性悪説 結果がすべて。権利意識が強い 失敗を認めず他に責任転嫁しがち 契約以外のことは基本的にやらない。手当や代休が必要
6. 属性・その他	組織や集団主義の意識が強い 給与などの情報交換はめったにしない 出身地毎のまともりは強くない	個人主義が強い 社員同士の給与の情報交換は当たり前、納得できないとクレームしてくる 出身地によるまともりは強くグループ編成のネックとなる

(2) 米国W社との提携後の企業文化の変化

アジア事業の展開は1997年のアジアショック(通貨下落)で縮小解消となった。それでもそこで学んだ異文化体験は大きな財産であり、その後の仕事にも大いに役立った。しかし、2002年の米国W社(世界最大

の小売業)との提携、2008年の完全子会社化により企業文化は全く異なったものに変化してしまった。

Tオーナーの『顧客最優先』の企業理念を敬愛して来たが W社の『利益最優先、株主最優先』の前に従来の企業基盤はあえなく崩壊してしまった。

バブル崩壊後、多額の借入金ネックとなり結果としては身売りすることになった。同時にS百貨店を含むSグループ全体が崩壊し、別の傘下へと分散していった。日本的経営がグローバル社会に飲み込まれた典型例としてみてほしい。

項目	S社の時代	W社との提携後
1.対象事業	総合生活産業として小売業のみならず多角的に事業展開(金融、ホテル、旅行etc)	小売業に特化、しかもW社の事業モデルに合わないものはスクラップ&ビルトの対象となる
2. 商品	価格だけでなく品質や付加価値も重視。MUJIブランドのルーツでもある	エブリディ・ロープライスのもと徹底的に安さを追求。地域一番の安さが企業戦略
3. 店舗・売場・サービス	買物プラス賑わいやサービスも重視した売場。小売りの機械化には否定的な考え 可能な限り顧客の要望に応える顧客最優先を重要視	購入頻度の高い商品にしぼり、施設やサービスも最小限とし価格を下げる。徹底したシステム化・合理化でコストを下げる 顧客にできるサービスは限定的
4. 店の人員配置	人材育成を前提とした社員層とパートタイマー層との配置	店長と店長代行以外はパート層で構成。徹底した人時管理による人件費比率の低減
5. 施設面	社員食堂・休憩室など福利厚生施設を含め一定基準の倉庫など後方施設の設置	パート層中心のため福利厚生施設は不要。倉庫スペースの削減と作業の合理化の面から売場の陳列什器を倉庫式に変更(見た目より効率性重視)

6. 本部と店舗	それぞれが両輪としての対等な関係 店からの提言やQC活動も実施されていた 双方での人事交流による自社社員育成	本部の指示を店に徹底させるトップダウンの関係 役割・機能は全く別 外部専門人材の登用
7. 株主との関係	グループ会社や関係先が株式を持ち合うことが多く、株主は最重要視はされていないなかった	W社と提携後、上場廃止。W社の完全子会社となる(今や株主最優先は明らか)
8. リストラ	創業30年余を経た1990年初頭初めての「早期退職公募」が実施された	資本提携以降12年間で4回の大がかりな「早期退職公募」が実施された

5. 日本語教師の道～ベトナム日本語学校への就職（第2ステージ）

W社のグローバル化の厳しさと長時間労働のはざままで、ついに32年間のS社勤務にピリオドを打ち、体力・気力があるうちに第2ステージへ転身した。やはり心の中に教壇に立つ夢が残っていたことや子供たちの成長ぶりを見ての決断でもある。

退職後まもなく「日本語教師養成講座無料見学会」の新聞記事が目に入った。異文化との接点や海外勤務の可能性を描きながら、日本語教師の道の第一歩を踏み出した。以来1年3か月かけて420時間受講し、資格を得た。

受講中から活動に加わっていたNPO 2団体に正式な日本語教師として参画した。インドネシア人看護師に日本の介護福祉士受験をサポートしたり、在日大使館員の子女に補習授業を行ったり、短期留学生の授業を任されたり、充実した毎日だった。還暦前に海外勤務に就くのが目標だったので就職活動と生活拠点の下見を兼ねて海外には何度も足を運んだ。大連、広州、ウルムチ、カシュガル、マレーシア、韓国 そしてニューデリーの訪問がベトナム行きのかっけだった。

現地在住の日本人女性オーナーと面談したあと、「あなたの経歴に合った人材を探している提携校が

ある」と切り出し、その場で日本へ連絡を取ってくれた。そして提携校の男性とは面談の日時についてのみ言葉を交わしベトナム日本語学校のオーナーと面談する運びとなった。

帰国間もなくオーナーと会った。開口一番「ホーチミンのS日本語学校(以下S校)を立て直してもらいたい。日本語教師の仕事もしてもらおうが、本命はそっちだ」

オーナーはベトナム人留学生として来日し、結婚し日本に帰化し日越の懸け橋の存在。1989年にホーチミン市(旧サイゴン)に初の日本語学校を開設した。人気は高いものの経営が厳しい状況の上、オーナーは日本国籍のため現地に常駐はできない。きちんと運営ができる人に現地をみてほしいとのこと。意外な申し出に判断がつかず、即答できなかった。2か月後に再度面談を実施。

6. ベトナム日本語学校での5年7カ月をフラッシュバック

その年2011年9月11日にホーチミンに向かうJAL便の機内にいた。

オーナーのKさんの申し出を受け入れた理由はいくつかある。S社で得たキャリアの集大成ができると思ったこと。黒船W社に飲み込まれた敗北感と不完全燃焼な思いは残っていたので、助っ人としてリベンジのチャンスだ。日本語教師として新たなキャリアを重ねることは一旦棚上げした。Kさんが私財を投げうっても経営が好転しない原因と戦わなければならない。一気に腹が決まった。1, 2年が勝負と思ったので家族にはその旨了承してもらった。

(1) オーナーのKさんとも議論をしながら進めた組織改革

<組織理念>～良い組織とは

- ・現場のことを最優先に考え、現場の意見が経営に反映されている。
- ・情報が全員に伝わり、自分の役割を理解し、行動している。
- ・時代の変化やニーズを的確にとらえ、常に改善に取り組んでいる。
- ・上司が部下を育成し、部下はチャレンジ意欲をもって仕事している。

・全員の目標が一つにまとまり協力して成果への努力をしている。また、努力した成果が、全員に公平に配分されている。

(当時の現状⇒改善点)

- ・S校で一番偉いのはKさんまたは校長との認識 ⇒ 学生最優先を徹底して訴えた。
- ・教務部と管理部がバラバラ ⇒ 毎週の運営会議で相互理解を図り、主役の教務部を管理部が下支えする構図を作り上げた。
- ・医者と教師は尊敬されるが、安い給与が当たり前 ⇒ 良い仕事にはそれに見合った待遇の改善を実施した。
- ・業績関連のデータは開示されていない ⇒ 学生数や進級率など教師の実績に関連した情報は開示するようになった(透明性の向上)
- ・最大の強みである教授法の活用が不十分 ⇒ 師範大学インターン生受け入れを契機にベトナム人教師採用ルートができ、事業拡大に対応できるようになった。

<S校職員全員で取り組むこと>～実現すべき共通目標

1) コミュニケーションの良い組織にする

・学校は「人」が財産。個人の意見を尊重する。言うべきことは言う、やるべきことはやる。風通しの良い状態を可視化する。

2) 少しでも多く利益が上がるよう努力する

・一人でも多くS校のファンを増やすため一歩ずつ前進する。お金は与えられるものではなく作っていくもの。お金がないと何もできない。

3) 上がった利益は公平に配分し、職員が安心して働ける学校にする

・質の高い授業、質の高い仕事をして納得できる報酬の獲得を実現する。

(2) 戦いの軌跡～学生数800名から2000名に

・学生の数、教師の数、教室の数の三位一体が必要。

(学生)

・初心者を中心に、「会話のS校」の強みを発揮。最多の日本人教師数で対応。次クラスへの進級率アップに注力し、受講継続者を増やす。

・日本語教育と日本文化の両輪は創設時からの伝統。建物への投資に加え、運動会・文化祭・季節イベント・部活動(茶道、剣道)などソフト面も充実発展。

・話せるS校、日本文化のシャワーS校の戦略に加え、日本語教育レベル向上に特化。一方で、技能実習生や半ば就労目的の留学斡旋など送り込みビジネスには手を染めず。S校の高質の日本語教育の名声は今も支持されている。

(教師)

・日本人教師の採用権限を東京からホーチミン側に委譲。現地日本人教師と応募者とのスカイプ面接で必要人材の確保が容易となった。

・ベトナム人教師は、従来からS校唯一の「日本語教師養成講座」を強化発展させ修了者を採用。併せて師範大学日本語学部と提携し、インターン生を恒常的に採用する仕組みを確立。自前での教師養成体制を確固たるものにした。

(教室)

・初心者拡大、既修者の進級による増加に対応し、4F・5Fを徐々に借り受け2014年末に全館S校体制が完了した。

・同時に清掃や補修のメンテナンスの態勢を強化した。

(学生数) ~1学期(3か月) 毎の学生数

・2011年スタート時は812名、2012年末は1062名、2013年末は1186名。2014年末は1549名、この年1500名達成臨時ボーナス支給。そして2015年末には外部企業の受講者を含め2000名を突破し、2度目の臨時ボーナスを支給。

(その後の経緯)

・2013年の日越国交樹立40周年を契機に訪日ベトナム人が飛躍的に増加し、様々な送り込み機関がS校の競合として参入し、初心者層への影響を受ける。しかし話せるS校・ハイレベルな教育のS校の基盤により在ホーチミンの日本企業や大病院の幹部教育や高校への出張授業等S校独自の事業を拡大した。そして2016年には日本語教育未開拓のベトナム中部にある行政や学校と提携し初の日本語学科を設立した。

5年7カ月を経て『日越の懸け橋』としての活動は着実に前進した。

7. 終章~第2ステージを終えてわかったこと

(1) 当たり前のことを当たり前のこととしてやることの大切さ

建前と本音を一体化するには多くの戦いと日数を要する。でも目標達成の快感は計り知れない。時にはオーナーと喧嘩するも孤立を恐れず自己主張を貫いた。

(2) 失敗には成功に転じるためのヒントがある。恐れるな、落ち込むな

オーナーのKさんの創設時から変わらぬこの寛容さに救われた。個人の強みに着目し、ほめて育てる方法は海外や日本の別なく有効だと思う。

(3) 会社は利益がないと何もできない~S校も一民間企業である

経費削減だけで出した利益は、発展につながらない。強みを生かす投資が必要。とりわけ人に(顧客と従業員)対する投資は最たるものだ。

(4) 組織の永続的発展には後継者の育成と権限委譲が必要

S校ではベトナム人と結婚した日本人男性教師に後を託した。彼のバランス感覚は組織の一体化に大いに貢献している。一時的な助っ人日本人ではないからだ。

(5) 『働き方改革』は海外の方が日本よりはるかに進んでいる

家族ロイヤリティや公私のけじめなどを軸に仕事の仕方・進め方を考える。

本当の豊かさとは何かをこれからの人生で考えていきたい。



第2ステージ前
(2009年56歳当時)

(おわり)

はじめに

昨年の12月に東京潮陵樽中会の南澤事務局長よりご連絡があり、寄稿の依頼を受けてこの原稿を書いています。潮陵を卒業して後に社会で研究と教育に長年携わる者として、なにが皆様にお話できるか心もとないのですが、振り返ってみると、何となく潮陵スピリットやフロンティア精神のようなものがあるかとも思いますので、若い方々の参考になれば幸いです。潮陵時代には自分が将来どのような人生を歩んで行くかなどは予想もつかないし、知らなかったわけですが、ただお互いに各自がそれぞれやりたい事があるのは認め合っていたように思いました。同時に試験など目の前の進路については大変で、一喜一憂もしていたと思います。

小中学校時代から潮陵での生活

私は入舟町で生まれ、奥沢小学校、向陽中学校を経て潮陵へ入学しました。小学校時代からの遊び仲間には山内進(後の一橋大学長)、私の畏友である浜松聖隷病院の精神科医の生田孝(理博・医博)、小学校からの名ジャンパーであった間宮一(防大から後に潜水艦長)など多くの人物が居り、今も付き合いが続いています。

向陽中学校時代には、クラブ活動などで楽しく過ごしましたが、私自身、子供の時から風邪に弱い体質で、中体連など肝心な時にいつも風邪で熱を出し、戦力になれず肩身の狭い思いをしました。また、比較的のんびり屋で遅刻溜り込みが多く、向陽中学校への上り坂は息切れで往生したものです。潮陵高校入試の時には前日からの風邪が悪化し、当日は試験問題を前半に解くのがやっとで、試験後は歩くことができずタクシーで帰宅し、体温を測ったところ40.5度もあり、病院直行で、これは試験も駄目と覚悟しましたが、何とか合格し、無事に春から潮陵高校生活が始まりました。

潮陵時代にはユニークな友人も沢山おり、いわゆる試験の成績の善し悪しに一喜一憂する友達という関係を越えて、将来の自分たちがやりたいこと、好きなことに関連する何かで、皆それぞれお互い

に少しずつ影響しあって若い頃の人生観を形成したと思います。

特に印象に残っていた友人は、前述の生田孝や、後にソニーの知恵袋と言われた武田立で、彼らの部屋へ遊びに行ったとき、生田君の部屋の物理学や天文を含む沢山の書物、天体望遠鏡や磨きかけの大口径凹面鏡などに驚き、また山歩きが趣味の武田君の部屋で、秋葉原の電気街のような電気回路やオシロ、電気部品の壁棚に囲まれた机を見て吃驚したものです。理工工学系の友人の迫力というものに触れた感がありました。

同時に私たちの世代は丁度、ビートルズが世界を席卷し、グループサウンズが全盛となる時に学校に居ましたので、勉学と同時に、ギターなど楽器の上手な友人も多く、特に、リードギターの品川守(後の国交省北海道局長)、セカンドギターの山本真樹夫(後の小樽商大学長)をはじめ、今考えるとユニークな面々が互いに時々のバンドを組んで良いレベルの演奏や練習をしていました。私達も彼らの演奏を聴くのが好きで、音楽が聞こえてくると皆、吸い寄せられるように集まって時間を過ごしたことを思い出します。

浪人・予備校と上京

私自身は小さな頃から本が好きで、何となく文学に憧れたり、ノーベル賞受賞者の湯川秀樹博士の小樽講演を聞いた影響で、将来、物理学の研究者になりたいという思いもありましたが、高校時代までに出会った迫力のある友人達が研究者志向で頑張り屋だったので、自分には無理かと考えました。実際、それほど勉強が好きでも、我慢強くもなく、ほどほどプラプラ人間であった私は、団塊世代の厳しい受験時代にあまり一生懸命対応せずに高校生活を送り、入試では通常の実力も出せずに北大医は失敗し、二期校(当時は一期・二期校受験制度)も東京医科歯科のトップ不合格となりました。トップ不合格とは、補欠合格者名簿順位(全部で18名)が明示され、入学手続きの現場で、意思確認の結果10番目の私の前で終了したからです。

呆然とする私達に、担当の方は「学生運動等で留年者が多く、今年は残念ですが」と言われました。当時御茶ノ水界限は学生運動も本格的でしたが、まさか自分の受験に直接関係があるとは思いませんでした。人生には様々な節目がありますが、これは大きな転換点だったと思います。

その後、桑園の予備校に通い、それなりに充実した浪人生活でしたが、いまいち真剣度が不足していた印象です。そのうちに年度後半に学生運動が一層過激化し、安田講堂での警察機動隊との攻防戦が始まり、東大入試が中止となる事態が生じました。その結果、大学間の玉突き現象があり、悩み、強気に準備していた大学から最終変更した大学受験も結局上手くゆかず、再度浪人が決まり、流石に落ち込みました。

その後、流れを変えるべく上京を決意し、駿台予備校中山寮に入り、御茶ノ水に通う日々となりました。予備校と、朝のラッシュの厳しさにも慣れ、寮時代には結構楽しく暮らし、卓球やバスケットで運動不足を解消しましたが、当時のバスケット同好の一人に中村雅俊（慶応から文学座を経て俳優へ）が居ます。受験勉強漬けで苦労した駿台中山寮・同室の3人の友人とは今も連絡を取っています。入試が近づき、これだけ色々あった自分には医学部は向いておらず、以前の物理系へ志望を決めようと結論し、東大理Iを受け、一応、横浜や和歌山など公立医学部も併願受験したところ、今度はすべて合格しました。でも、一度決めた方針は堅持し、理Iへ入学した次第です。この年（昭和45年春）は潮陵から現役一浪二浪含め5名の東大入学者が出たと記憶しています。滞貨一掃と言ったところでしょうか。何年も随分迷惑をかけた両親には頭が上がりず、入学後は自分で学費を稼ぐという決意でした（実際は若干、下宿代の一部を仕送りしてもらいましたが）。

大学生活と宇宙研での大学院生活

憧れの大学生活が始まりましたが、一番の問題は、長年の受験生活で勉強が一切嫌いになったことでした。なにせ元来、繰り返し勉強が嫌いな人間でしたので、地道な勉強を続けることができません。また大学も長期ストライキの可決など、授業があっ

てなきがごとの状態でしたので、結局、入部した柏葉会合唱団の駒場の部室と練習場に入り浸り状態で、追試と留年の危機を迎えます。四苦八苦しながらも何とか切り抜けて、2年次の学部学科配属が決定する時期となり、初志の理学部物理は夢のまた夢で、結局、名称があまり冴えず、競争率の低そうな航空学科・原動機コース（ジェットエンジンや推進工学コースと名づけていれば競争率は全く違ったと思います）に決まりました。でも当時から自分なりに、名称や他への印象はどうでもよく、物理工学的なことが希望でしたのでピッタリだと安堵しました。

学科での航空宇宙工学の専門授業は面白く興味も湧いたのですが、なにせ優秀な学生が周りに多く、勉強もなかなか大変です。また合唱団の方も高学年は色々あり、演奏会でも重要な立場があつて忙しく、時間不足となります。その結果、相変わらず追試のお世話になり、成績はどちらかというと低空飛行状態でしたが、無事に進級し卒業研究は木村逸郎教授（燃焼・プラズマ工学の権威）の研究室に配属となりました。故木村先生は学生に穏やかに接する方で、研究が大好きで、私の生涯の手本となる学者であると思います。学部最終年度になり初めて専門や物理の面白さに対する意欲が戻ってきた感がありました。

最終学年では大学院を受験するとともに、日航（旧）の入社試験を受け、正直に「大学院を受験予定で、両方合格したら大学院の方へ行きます」と面接で述べました。なかなかそこまで明言する人間は居ないと思うのですが、先方も呆れながらも却って大らかで、結局、内定の連絡を頂きました。同時に前後して大学院の受験勉強を開始しましたが、有名な米国の研究者の邦訳書「気体力学」を熟読・勉強したことが、勉強嫌いだった私の転機となりました。理論も実験も含めこのような面白いテキストを書く研究者への憧れが私の背中を押したようです。遅まきながらも真の勉強の意味が分かった時期でした。

大学院試験は出来不出来があったものの、細かなところに拘らない私の答案をきちんと見てくれたらしく、なんとか合格しました。日航には丁寧な事情とお断りの手紙を書き、同時に大学院の研究を

頑張らねばと決心しましたが、木村研に残れるのは一人だけで、結局、学生間で調整し、駒場の宇宙科学研究所 (ISAS) の小口伯郎教授の研究室に所属することになりました。宇宙研での大学院生活の始まりです。

小口研は全国の幾つかの大学の出身者も居て、研究の本質を叩き込まれました。優秀な院生が多く、気体分子運動論、並びに、超音速と衝撃波の世界的な研究拠点と言える研究室で、毎週のゼミでの議論を経験しても、なかなか自分の立ち位置を見つけ難いと感じました。理論や計算では私の能力で独自性が出るかが不明でしたが、何故か実験が絡むと、発表している先輩の院生がそれほど切れるように思えず、実験研究ならば私も切り込める部分があると考えて、その分野で修士研究をスタートさせました。優秀な技官と助手の先生方にサポートを受け、また、実験装置は一から加工や電気回路工夫も必要で、随分勉強するとともに、独自の実験法を考えて行くという研究の「いろは」を学ぶことができました。特に小口先生はいくら調べ物を詳しく発表しても、「調べたものは解った。で、それでこの何が独自なの？」とバツサリ。そのようなゼミが毎週続くので、自分の番までに、なにか論文を読み調べたことから初歩的でも良いから独自のものを積み上げねばなりません。この格闘は私を随分鍛えました。故小口先生には研究の厳しさと独創性のなんたるかを教わった次第です。

修士研究ではなんとか実験結果を出し、修論を提出し、博士課程へ進学しました。当時からポスドクの問題はあり、先行きの見込みは全くなかったのですが、まずは博士を取ると割り切ったの進学です。一応、塾のバイトや、育英会 (JASSO) 奨学金の受給 (貸与) はあり、幸い博士テーマにも恵まれ、自分なりの独創性を見出し、実験結果が出て、博士論文を纏めることができました。博士進学した同期の仲間も、無事全員なんとか修了し、その多くは会社や研究所に勤めましたが、私は大学への就職を希望したため、ポスドクの悲哀を味わうことになりました。その時は、家庭の事情も考慮して外国渡航を躊躇しましたが、今では思い切って外国ポスドクの経験も良かったのではないかと思います。

今は特に日本国内の博士取得後のポスドク状況

が最悪でもあり、若い人には博士取得後は思い切った海外経験を奨励したいと思います。日本人の院生は海外を躊躇することが多いのですが、日本でしっかり修士 (博士前期)・博士の研究を行えば、海外の高等教育機関や研究所へ行っても十分に戦えます。またなぜか今だに我が国の大学や会社の研究所は海外からの帰国組には弱いという特徴があるので、帰国後の就職を考えて海外でアピールをすれば、日本にしがみついて無駄な苦勞をするより、はるかに有益な経験を重ねることが出来て、帰国後の道も開けるでしょう。私は今も海外へシンポジウムなどで行くと、「日本人のポスドクを雇いたいのだが」との申し入れを受けることがあります。欧米や ASEAN の研究者達の日本人研究者に対する信頼性は高いのです。

ポスドクと都立航空高専への就職

博士を取得した私には直ぐに大学などの就職口はなく、唯一、知人の紹介で都立航空高専 (現都立産技高専) の非常勤講師の口がありましたので、1979 年の 4 月から働き始めました。同時に塾のバイトも続ける日々でしたが、同高専の高月校長から、まだ就職が決まっていなかったのなら、本校の助手のポストがあるがとお声がけを頂き、7 月から航空高専の助手として働き始めました。結果として、この時に高専学生の気質と特徴を知ることができたことも後に役立っていると思います。助手として実験の指導やゼミの指導も開始され、初めての卒研指導も経験しました。特に 2 人の 5 年生と卒研開始後に夏休み返上で、私のマンションで朝から晩まで何日も論文の読み合わせやプログラムの開発を行ったことなど思い出深いですが、高専生としての彼ら二人の実力を実感したことも事実でした。一緒に部品加工をして実験装置を作ったり、論文から現象に合わせた微分方程式を作り、それを数値解析するプログラムを開発して解いたり、実験結果と比較したり、誤差を解析したりといった作業を二人の学生はごく普通に進めるのです。後は他の研究と比較したり独自の物理モデルを工夫したりというところを一寸アドバイスすればその先へ進んでゆきます。この経験はある意味で若い人の新しい可能性を発見する衝撃的なものでした。

室蘭工大での研究教育生活と北海道航空宇宙産業基地

都立航空高専に助手として就職し1年半となる頃、室蘭工大での公募があり、応募しました。北海道生活経験者の私は室蘭工大も知っており、かつ高専時代に海外のシンポジウム参加の論文も投稿していましたので、博士論文など発表業績を纏めて応募したところ、運良く採用され、1981年4月から室蘭工大産業機械工学科の花岡裕教授の下で学科最年少の助教授として教育研究活動を始めることになりました。花岡教授も穏やかな人格者で、私が若さに任せて勝手な研究活動を進めるのを認めてくれました。室蘭工大時代に航空宇宙と熱工学に関連して多くの研究を進めることができたのは、ひとえに当時の花岡教授と斎藤図教授という熱流体の二人の研究者の暖かなご支援があつたのと、現在も深く感謝しています。残念ながらお二人共、故人となりましたが、私の生涯の師として尊敬する教育研究者でありました。

室蘭工大時代はまた、学生の優秀さに感動した時代でもあります。学部生のゼミでは、春から原著教科書について数式を10名の卒研生全員に分担で厳密に導出してもらいながら、皆でチェックし、百数十ページの訳を夏までに終えましたが、これは他大学でも卒研生では経験がありません。数式を追いかけているので、流体力学の内容についてはほぼ皆理解をしており、後期からの卒研実験などで議論をしても、共通の話題に皆一応ついてくることができました。

日本の受験生や一般の方々にはマスコミなどの影響で、東大を筆頭とする、極端な日本ローカル版大学のヒエラルキー(社会文化階層)を無意識のうちに形成してしまうところがあり、私はこれが現代日本の大きな欠点であると感じています。実際には、日本の国立大学は各地で優秀な学部生を教育し、大学院生の教育研究環境にも特に大きな差異はありません。専門分野による違いはあれ、大学によって教科書に差があるわけでもなし、情報収集の容易さや、教育内容にも先端の研究内容にも差はないのが実のところ。特に地方大学は、予算の苦労はあるのですが研究の自由度があり、余計な学会の雑用に煩わされず、研究者と学生の意識

さえ先端的であれば、あとは工夫で世界と戦うことができるのです。幸いなことに、私は室蘭工大時代にまさにその経験をすることができました。どの大学や研究機関の所属かは問題ではなく、研究の先端性をどう意識するか、国内外の研究動向を意識して、なにが独創的なことで、そのために今、何ができるかを強く考え、具体的に行動することが、一番重要だと思います。

室蘭工大において、予算が少ないなりに自作や中古のものを組み上げて研究テーマを開拓し、数年で築いた実験装置で、優秀な学生や院生と共に国内外に研究成果を少しずつ発信できるようになりましたので、北海道に航空宇宙の種を蒔きたいと夢を持って室蘭に着任した私は、いよいよ実現に向けて活動を開始しました。

まずは、日本航空宇宙学会の北部支部がなかったので、東北大で大きく活動を始めていた高速力学研究所の高山和喜先生や、北大の木谷勝先生達と相談し、航技研角田の皆様のご尽力もあり、皆で北部支部を設立することができました。これと並行して北海道庁と連携し、宇宙科学技術連合講演会の札幌開催、ISTS(宇宙科学技術の国際シンポジウム)の札幌開催を計画し、北海道、航空宇宙学会と宇宙科学研究所の皆様のご尽力で無事実現をすることができました。これらの催し物を契機にして、北海道内外の機運が一挙に盛り上がり、室蘭地区の航空宇宙研究開発計画と室蘭工大での航空宇宙学科・コースの設立、北大の宇宙工学関連学科の設立が動きとして実質化し、さらに通産省の計画でNEDOが勧めていた上砂川の大型落下等計画に合わせた日本製鋼所での50m落下実験施設の開発など、1987年前後から航空宇宙関連の研究開発が実際に動き始めたことが、現在の大樹町をはじめとするロケット開発や北大、室蘭工大の航空宇宙関連学科の活動につながりました。北海道では、これからもまだまだ航空宇宙の各分野でできることがありそうです。

一方、私自身はその一連の動きの実現完成を見ることはなく、1990年に千葉大学へ転任することになりました。これには若干の経緯もあるのですが、省略します。

千葉大学へ・研究での苦勞と楽しみ

千葉大学へ助教授で転任した私は、意外と封建的とも言える学部学科の教員組織の中で新参の教員として苦勞することになりました。お声をかけていただいた大先輩の本間弘樹教授は良い方でしたが、学科内の他の教員にとっては、助手から上がった新任の助教授と全く違いがなく、新任助教授として一から学科内プロセスを開始する苦勞を味わうこととなりました。研究面でも、同じ研究室を運営する本間教授は素晴らしい大きな実験設備を既に持っていましたし、限られた実験室など面積の問題もあり、室蘭時代の多くの実験研究は展開できず、新たに小さな装置の再構築で研究を開始しました。自分の研究室を構築する喜びを室蘭で若干味わうことができた私は、じっと我慢の10数年を送ることとなります。でも一方で、本間教授との新しい実験もとても楽しく、独自の工夫も加えることができました。

かなり長期間、助教授として我慢し、研究テーマを絞って活動しながらも、新しく面白い研究成果を上げることができましたが、本間先生のご定年後数年して、ようやく研究室を教授として切り盛りすることができ、助手を採用することができて、新たな発信活動を開始できました。具体的には、以前から研究室にあった極超音速の流れに関連した独自の計測システムを構築し、ブラジルからの博士学生との議論からチャレンジを始めた、ナノ秒規模の非線形 CARS (コヒーレント・アンタイ・ラマン分光) 計測を実現し、世界で初めての実験データとして発表することができたのです。ミリ秒レベルの燃焼実験開発で既に有名な米国 NASA-AMES の研究者達に本実験の予備構想を話したところ、「そんなものできっこない、クレイジーだ」と言われたことが発奮材料で、成功したものです。ノーベル賞など皆が注目する分野の大きな結果ではないのですが、まだ誰も注目できなかったことに着目し、人類がまだ達成できなかった実験結果が、秒速 10km 以上の衝撃波の数ミリ後方での空気窒素分子エネルギー状態の超高速分光として出てきたときは、流星に感動すると同時に、物理学や数学は実に正直なのだと思感しました。この結果、スペースシャトルなどの前面で発光する強い衝撃波のすぐ後ろの

温度は則2万度などではなく、一部数千度から分布をもって徐々に上昇することなどが明らかになり、輻射熱防御システムに関する新しい知見が得られました。

他にも日本のデジタルカメラの特性を生かした、背景志向型シュリーレン画像計測法による超音速流れの密度場計測(難しい名前ですが、要するに早く、安く、上手く超音速流れの密度場を CT 計測するもの)など、面白い研究を千葉大で展開することができました。ただ、研究の面白さを実感する一方で、千葉大でも研究室に数名は居たのですが、あまり博士課程(博士後期課程)に進学する学生がおらず、寂しい印象でした。ASEAN や欧米の学生が多く博士課程に進むのを見ると、日本の大学院が若い人々と共に世界から取り残されて行くのを傍観せざるを得ず、誠に悔しい限りです。

木更津高専校長としての活動へ(高専の運営と全国活動)

そうこうしているうちに千葉大教授としての定年が近づいてきました。定年後の進路を考え始めたところへ、当時の斎藤千葉大学長より呼び出しがかかり、評議委員であった私は、学部で何か問題が起きたかと慌てて学長室に駆けつけましたところ、木更津高専への校長赴任の可能性を打診されました。国立高専は全国に 51 校あり、全体が独立行政法人として管轄された高等教育機関です。中学を卒業し入学する高専の学生は、高校と短大を一貫した 5 年間のシステムにおいて、主に工学の専門教育を受け、数理系と専門性に秀で、実習演習能力を養って卒業します。数学や物理学など理系の授業カリキュラムは盛り沢山で、二年時にはほぼ大学の数学を履修し始め、卒業時には工学系大学院受験生程度の専門と理数系能力を獲得して行きます。私も都立航空高専に奉職し、千葉大時代に研究室には常に高専からの編入学性、修士大学院生がおりましたので、その実力は知っておりました。校長として好きな研究が継続実施できるかどうか判りませんでしたが、受験経験や浪人して大学に入った頃より、出会いや運命の不思議さを感じていたこともあり、このお話はご縁があったと思い引き受けることにしました。

2014年四月より木更津高専に校長として着任したとき、私が計画していたのは、木更津高専の研究力の増大、卒業生の進路の充実、教育活動のグローバル化、産学連携などでした。独立行政法人としての経常的予算は当然厳しいものがあるので、まずは科学研究費(科研費)の獲得を充実させる必要がありました。木更津高専の教員数は76名程度、大学で考えるとおよそ3学科弱といったところでしょうか。ただ、技術職員の数は比較的多く、大学よりは実験・実習環境は整っています。科研費の年間代表者獲得数(新規継続合わせ)は目標30件、そのために新規申請を毎年50件以上出せると良いと考えて、申請書にできるだけ目を通し、可能な限り研究内容や申請書の書き方、適切な図表の挿入など、先生方と共に研究計画書を改訂し申請に望みました。一人では限りがあり、当然半分程度も推敲できないのですが、毎年継続して増加させ、経験者が申請検討班を構成して3年目からはグループで申請検討をすることができるようになりました。その結果、着任後から従来の2倍以上の、ほぼ25件程度の申請代表者獲得を実現し、最終年度の申請の結果30件に近い科研費獲得を実現できました。外部資金全体としては獲得目標を一億円に置き、なんとか近づけるように雰囲気醸成しましたが、教職員の皆様がそれに応えていただき、私としてもとても励みになりました。

学生の進路に関しては、就職状況は以前からとても良かったので、3年次編入学の充実を図り、編入学における面接の答え方の基本姿勢、おさえるべきコツなどを校長が直接に受験予定学生にアドバイスしました。なにせ一生のことに関連するので学生も一所懸命です。また木更津高専専攻科への進学(学部と相当し学士を認定される)も、できるだけ多く受験して多く合格するように勉強してもらい、毎年40名程度の専攻科生を入学させました。これらの専攻科生は、入学二年後には学士取得と同時に、より良い希望会社への就職と、大学院を受験することができるので、積極的に大学院へ高専の専攻科の実力を売り込み、その結果、豊橋、長岡両技科大の他、東大、東工大、東北大、慶応大などかなりの希望大学院進学者を輩出することができました。つまり、従来の高校・大学・大学

院のルート以外に、実力勝負の専門高等教育バイパスを構築しようとしたのです。これは相当に成功しており、日本もようやく受験のみの輪切り分断高等教育から、実力勝負の自在高等教育に少しシフトができてきたということでしょう。いずれにせよ、日本のすべての人が自分の好みの仕事、好みの専門を学ぶ点において、固定された輪切りのルートではなく、自由自在な年齢とチャンスに勉学を続けて、最も高いレベルまで教育と研究活動を享受できる道の存在が理想と思います。

グローバル化と産学連携についてもいろいろ手を打ち、高専の皆様の力で実現ができました。私立の金沢工大(および付属金沢高専)のみが加入していた、工学に関する国際教育検討組織 CDIO への国立高等教育機関として初めての加入を実現し、JABEE とともに工学教育に対する国際標準を満たす教育レベルの学校として認められた結果、海外の教育機関から様々なオファーが来るようになりました。実際に学生の渡航のチャンスや予算獲得も比較的可能性が高くなりましたが、学生にとっては、何よりも、海外経験は若いほど良く、かつ、なにか目的をもって滞在するのが理想的で、そこでは学生諸君は見違える程の変貌を示します。

一方、木更津高専で校長として着任した翌年に東京高専の古屋校長より引き継ぎを依頼された、全国高専連合会の会長も私の契機となる出来事でした。あまり喜んで引き受けた仕事ではなかったのですが、やはり全国の国公立高専57校の取りまとめと、高専ロボコンなど各種行事の実施を行うので、調整が難しく苦勞しました。でもその内に高専全体の取り纏めということから、中央教育審議会の大学分科会メンバーや、就職問題懇談会のメンバーとしてのお声がかかり、高専全体を代表して文科省の審議の場に参加し、意見を言う機会が増えました。大学と違い、守備範囲が限られるので、あまり意見を言うことはないのですが、わが国の専門教育に関しては一家言ありますので、時々コメントをすることができました。特に若い高専相当年齢からの専門教育に関して、日本の高専教育システムをグローバルに展開し、その国と日本とで共通の専門教育基盤を持つ若い人材を育成供給することの重要性を文科省の審議官や課長級の方々にお

話しできたのが最大の収穫でした。大学の学長クラスの方はやはり自分の大学との直接的な関連で高等教育を考えがちですので、全国高専(日本全体)と自校との両方から高等教育を考える視点を持つことができたのがとても良かったと思います。

私学の専門学校校長(日本工学院専門学校・同八王子専門学校)として

木更津高専校長としての仕事は上記のように、なかなかやりがいがあり、当該校教育組織の充実も含めてもう少し継続したかったのですが、着任後4年がたち、68才を迎える頃に、本省などの諸事情か、特例可能な定年延長もなく、定年予定を宣言されました。若干落胆して「(独)国立高専は結構人使いが荒い割にはあっさり切る」などとぼやきながら、大学で客員教授の道等も探さねばと思っていたところ、中教審の大学分科会の委員メンバーで、私立の日本工学院専門学校校長である千葉茂・片柳学園副理事長(現理事長)からお誘いがあり、2018年4月より同専門学校・八王子専門学校両校の校長として着任することになりました。私の分科会での勝手な発言などを聞かれ、かつ、立ち話の折に、つい出たぼやきも聞かれてしまったようで、恥ずかしかったのですが、これもまたご縁とお引き受けしました。

高等教育機関である専門学校(専修学校)は、法的には、一条校である大学とは異なる範疇の学校ですが、長い歴史を有する専門教育機関で、現在まで日本の専門教育や生涯教育の重要な役割を担っております。高等教育の例としては、現代の米国コミュニティカレッジなどの新制大学が有名ですが、わが国にはそのようなシステムがなく、大学などの新設改組には、いわゆる従来通りの設置審の厳密な審査が必要となります。従って、現代の急速に変化する社会動向に十分に追従することは難しいと言えましょう。例えば、ある大学が観光学部を構想し、組織体制を整えて設置審を通すまでには数年かかり、かつ設置審が通った後もその教育システムを変更することは、最初の学生が学部卒業するまでは一般に難しいため、その寿命スパンは7年位と考えられます。実際に7年前に、現在のインバウンド状況と必要な人材をどの程度予測でき、カ

リキュラムを準備できたかを考えると、現存する観光学部などの教育実態がかなり社会の実情と異なっていることに気づきます。

つまり、専門学校は、従来からの基幹産業を担う専門分野の資格教育も実施する一方で、現代の米国で言われる「シリコンバレー的」な短期スパンの社会変化、産業変化に対応する専門人材をできるだけ早く社会に送り出す専門高等教育機関の役割を担う必要もあるわけです。日本が得意である、アニメ、ゲームなども含むエンターテインメント産業にこれから必要な画像処理・IT技術や、放送、演劇なども、ASEAN諸国からの留学生も視野に置き、スマホ普及やVR技術との融合やAI化をも含めて急速に高度な人材養成が必要ですが、設置審が要求するカリキュラムや教員体制などを素早く十分に整えられる大学等は現在のところほとんど存在しないのが現状です。現状では私学の専門学校のみが産業界との協力教育体制を構築しながらその状況に対応していると思っています。

2014年より職業実践専門課程制度が文科省より認定され、専門学校卒業生にも2,3年制は専門士、4年制以上は高度専門士の称号が付与されておりますが、前者は大学編入学、後者は大学院受験資格と認定されており、これまでに社会で認識されていた専門学校のイメージから、高等教育の多様化ルートの一翼を担う教育機関としての変化を遂げてきています。おそらく、様々な高等教育システムが全体として多様性を受け入れる教育機関となり、高齢化社会の充実や生涯教育、第二第三の人生設計に向けたスキルの獲得などに応えて行くものと思います。

もちろん変化流動する社会や産業・文化の動向に素早く追従し、高等教育を遂行するためには、教員体制の構築と産学連携が不可避で、先生方はとても大変になります。専門学校においては、「教育の日常生活に入ること、即ち現役の産業活動からの離脱」では駄目なので、教員側の文化産業への関わり方の持続性と自己啓発が常に必要で、やはり、いわゆるしんどい社会でもあります。同時に学生がとても好きな人でなければ、やっていけないため、何でもできる、テレビで有名な予備校講師のようなスーパーマンが理想ですが、そのような人

材は世の中になかなかいません。かくて私学である私の学校も経営と教育体制の整備、近未来社会への対応と変革にもがくこととなります。でも、専門学校長として、時々各教室を見回る時、寝ている学生がほとんどおらず、皆、教員や実習教員とやり取りしながら講義や演習を一生懸命にやっているのを見ると、「若い人が一番伸びるのは、好きなことに関連した学習や演習実習に熱中する時だ」という、ごく当たり前のことをしみじみ実感します。

ご参考までに専門学校の一授業例を挙げてみます。マンガ・アニメ二年制学科二年次のキャラクターデザインコースの学生に対する、作品演出・監督論の授業中の、「様式から学ぶデザインの応用法」の授業では、西洋史上に実在したデザイン様式として、ギリシャ・ローマ様式からゴシック、ルネサンス、バロック、ロココ様式の歴史的説明やデザイン様式の概要と特徴、実際の建築や室内装飾の実例写真とイラスト例、並びに、例えば、ロココ様式のロカイユ装飾の特徴や基本となるアカンサス植物の曲線適用方法、バロック様式との比較、色合いや装飾の特徴、バロック様式との混合デザイン状況の実例などを、ドイツ西部のアウグストゥスブルグ城やホテル・ド・スービーズ(伯爵邸)冬の間の写真やビデオを提示して教え、授業の最後には自分なりのロココ様式のデザインを10分程度の素早いアイテム演習として作成して提出するものです。

専門学校の授業内容とはどのようなものかを知っていただくと同時に、一般の方々が考える、マンガ・アニメのイメージと異なり、時代考証やアイテムデザインの現実性、仮想世界への応用性などに関しては、小説家や放送・演劇の世界や、建築・インテリアデザインなど同様に深いものがあり、それらの上に現代の文化としてのマンガ・アニメ制作があることを知っていただければ幸いです。

むすびに

昨年末に新しい共通試験の制度改革に待ったがかり、受験生は大変だったと思います。大学での

入試業務を含めて高等教育に携わってきた者として、この度の急な動きにいろいろ意見や批判はありますが、結果として一度ストップをかけた政治判断は良かったのではないかと感じました(もっと早く決断できなかったかという強い疑問は残りますが)。大学に代表される高等教育と卒業後の社会(諸外国との関連も含め)との流動的な未来の関係は、単なる入試制度の議論に帰着できる問題ではなく、もっと多面的で深く、沢山の制度改革と時間と膨大なマンパワーがかかるはずで、2-3年で変化する文科省の人事スパンの範囲を超えた長期のビジョンと、施策の優先度、まず何から実施するかも慎重に選んでゆく必要があると思います。就職問題研究会での議論の場の経験も持つ私個人としては、まずは就職システムなど出口改革を早急に一部国際標準化する(3分の1程度)方が、結果として効果的であると思いますし、人材の流動性を含む日本の国際的な競争力の増大にも役立つのではないかと感じました。

潮陵スピリットなるものは、独立自尊、未知のものへの希求心、道のない所を切り拓く開拓者精神などに代表されているのですが、同時にちょっと天邪鬼的で、道産子の人の好き



も入っているようで、関西人なら“あかん、やらん”と言い切ってしまうようなことも、何となく引き受けてしまう面があるような気がします。その結果、随分と損な思いや、悔しい思いもするのですが、同時に思わぬところで人から信頼される結果となり、私自身は長い目で見ると、意外に悪くはなかったなと考えています。進取の気性に富みながらも、性悪説に徹しきれず、まずは人を信じてそれに精一杯答えようとする。そのような私なりに感じる潮陵スピリットは、日本の範疇を超えてグローバルな精神とも相通じる所があるかもしれません。

私は昭和五年に積丹半島の古平町で出生した。

私の曾祖父が徳川末期天保九年に下北半島から北海道に移り、江差、美国で鯨業に従事し、明治初期に古平町を本拠として事業を拡大して、北海道西海岸の各地に十数ヶ統の漁場を開発して、最北端は稚内にも数ヶ統の漁場を所有していた。私が生まれた頃から鯨は不漁となり、早めに鯨業より足を洗い、古平町に作った十数カ所の倉を貸して生計をたてていた。昭和十年に小樽に移転し緑町に家を一軒購入して住んだ。私はマリア幼稚園、稲穂男子小学校に学んだが、弟が体が弱かったので、静岡県沼津市に家を買って移転した。稲穂町の家は新日本汽船の支店長社宅として、売却した。支店長の子供が男子二人であり、我々と年齢もほぼ同じであったので直ちに売却できた。石原慎太郎・裕次郎兄弟である。

沼津中学に進学したが、静岡県の進学校であり、私は一年副級長、二年級長を務めたが、クラスではソニーの大賀社長、雪印の片山社長、三共製薬の高遠社長、アサヒビールの佐野副社長、詩人の大岡信（ペンクラブ会長）と同クラスメートであった。後年文藝春秋の一九九一年十一月号に掲載された。

昭和十九年に時の井上海軍次官が「この戦争は敗れる。戦後の復興には若い力を必要とするが、現在中学生は工場か農業で働いて勉強する暇もない。これを補充するために海軍兵学校に予科を設けて一年下げて中学三年より採用する。学校も上級生の鉄拳制裁を避けるために江田島の本校から離れた長崎県の針尾島に作る。」として十九年の十一月に公募を行い全国から四万人の中学生が応募し、約四千人が採用された。中学三年からの入校であるが、私は約二百人採用された中学二年からの一員として入校した。従って軍事学より普通学のウェイトが高く、英語は当時敵性語学として陸軍士官学校を始め多くの中学校で禁止されていたが私の中学校では週五時間の英語の授業が継続されていたので分隊の仲間に英語を教えていた。何しろ英語の授業には日本語禁止、海軍体操も英語で行う等徹底した英語詰めであった。終戦と共に復員まで二週間あったので、特に頼んで英語と日本史の授業を継続してもらった。二十年の六月

に沼津の一家は小樽に逃げていたので、八月末に小樽に復員した。

早速小樽中学に海兵の在校証明を提出して入学を希望したが、米軍のGHQからの指示で「軍関係の復員は全校生徒の一割以下とする」との指示があり、入校を拒否された。父からは正規の学校は難しいから語学でもやれ、と言われ、英語は小樽高商の小林教授、独語はマリア幼稚園のソラノ・デンケル師、仏語は札幌の小黒病院マチルドさんに習うこととなった。英語は全国の高等学校の英文の試験問題を読んで本を伏せて直ちに訳する事、何しろ小林さんはロンドン大学で英語の発音記号を学んだ人なので、完全なロンドンアクセントを徹底的に仕込まれた。独語は二週間で「独語四週間」を読んで文法を独学し、テキストは小樽高商の哲学の先生と一緒に「反時代的考察-Die unzeitgemase Betrachtungen」-を読む難しいものであった。仏語はマチルドさんが「Ce qui nes pas claire n'est pas Franscaise」-明瞭ならざるもの仏語に非ずと言われた。この三カ国語のレッスンを二年半受けたので、何とか辞書を引かずに読めるようになった。

小樽中学は結局四年三学期に転入を許可してもらった。その為四年終了での高等学校の試験は受けられず、五年に進学した。五年の時は四年三学期の成績から一組の級長を命じられ、応援団長となった。小樽中学の生活は一年少々であったが、一番後列の席に座っていたので、専ら試験の答案を早く書いて周りの学生に回す仕事であった。算数の試験で前列の後藤君に廻した所、彼が私の書いたものをそのまま書いたにも拘わらず、山口の点と違うのはなぜだ、と教師に迫ったので二人共五日間の停学になった。停学はゆっくり本が読めるので支障は無かったが、母親が学校に呼ばれて停学中の態度を聞かれるのには参った。

高等学校受験に当たっては、終戦直後でもあり、最大の問題は食糧問題であるので、東日本の高等学校に文書で「貴校の寮では食事に米飯を食べられるか。」と質問したところ、「米飯を出す。」と返事があったのは、仙台、新潟、弘前、山形の四校であった。父に相談した所、「新潟、弘前、山形は美人の産地だから仙台にしろ。」と言われ、仙台

の二高に進学した。

戦後京大の湯川教授を始め、原子物理学が流行しており、小樽中学の時ポーアの量子力学、ハイゼンベルグの不確定性原理の本を受読していたので、高校は理科に進学し大学は東大の原子物理を目指した。夏休みに北海道に帰省するとき、偶々青函連絡船で東大の物理の学生と一緒にだったので「来年は東大物理で嵯峨根教授の下で原子物理を学びたい。」と言った所、「原子物理は実験物理だ。戦後日本にあった二台のサイクロトンは米軍に破壊され、また米国にはコンピューターがあって日本で計算機で一ヶ月もかかって計算する問題をわずか数分で計算できるので勝負にならない。原子物理を学ぶのなら、日本の大学では駄目だから、ポーアのいるシカゴ大学に進学すべきだ。」と言われた。当時まだ軍国少年だったので、「米国になど行くものか。」と思い原子物理を断念した。当時は仏文学が高校では流行しており、ボードレー、マラルメの詩を愛読していたので、大学は仏文と思い仏の詩を愛読していた。ところが大学入試の直前郷里の古平町が大火となり、住居を始め十六個あった蔵も全焼した。父より「残念ながら欧州留学は不可能だ。申し訳ないがサラリーマンになってくれ。」と言われ大学は経済学に進学した。東大に進学して驚いたのは経済学部の全教授がマルクス主義であり、近代経済学はわずか三人の助教授のみであった事であった。従って講義は全く出席せず、三人の内古谷助教授のゼミナールのみ出席した。駒場では大内兵衛教授の経済学を聴講したが内容はつまらなかったが、講義が終わった後電車に乗る迄毎回一緒に雑談するのが最大の楽しみであった。大内さんにこの一冊の本を読むとしたら何ですかと問うたところ、言下に「ロンドン・エコノミスト」と言われ、それ以来五十年間退職するまで愛読した。

就職するに当たっては、図書館で「日本が誇る三企業」という本を読んだところ、「横浜正金銀行、三井物産、日本郵船」とあった。経済学部の事務室で「この三社を受験したい」と言ったところ、「正金、物産は既がない。」と言われ、その後身の東京銀行、第一物産を受験した。日本郵船は受験したところ、口頭試験で「何を希望するか。」と言われたので、「客船のパサーになりたい」と答えた所、「山口君当社が大型客船を持てる時代は、おそらく永久に来ない。」と言われ、断念した。東銀と物産は同日に入社通知が来た

が、東銀が三時間早かったので、東銀に就職した。早速札幌支店に配置されたが、仕事はつまらなく辞めて大学に帰ろうと思い、支店長にその旨申し入れたが、「東銀は近く為替専門銀行になる。今しばらくの辛抱だ。」と言われ、残留することにした。五年の札幌勤務を終え、帰京したが、新設の為替部に配属され、為替ディーラーの一号になった。それ以来実に約二十年ドイツ、ロンドン、東京の三カ所で為替ディーラーを勤務する事となった。ロンドンではポンドの切り下げを経験し、東京では為替課長を五年務め円の切り上げという絶好の機会を責任者として経験することができた。その後ブラジル、ニューヨーク総支配人を経験し、最後は米国ロスのエニオン銀行を英国のスタンダードバンクから買収しチェアマンを十年務めて退職した。日本の銀行を経営する為には、アメリカ人を使う経験は貴重なものであった。日本の銀行経営と異なり、地域社会と密着し南カリフォルニアの発展を常に考える経験は非常に楽しかった。ニューヨーク総支配人時代のエニオンバンク会長は兼任であり、毎月十五日はロスのホテルに宿泊し会長の仕事をしていたが、帰日後東銀の副頭取を三年勤めた後の六年のエニオン銀行の会長職は専任であり、米国の会長の重要性を痛感した。南加の色々な組織のメンバーを務め、アメリカ人と直接、間接に仕事を共にすることは得難い経験であった。又銀行の米人幹部に対しては毎年十二月に翌年のアサインメントを書面で渡し、翌年の給料決定に当たっては前年のアサインメントに比べてその遂行度はどの程度だったかを評価し、従って明年の給与はこの水準とするとの交渉は、日本の経営者と全く異なっており、会長職の最大の仕事であった。又株主総会は日本のそれと異なり、鋭い質問が次々と続き、会長の応答には数週の準備を必要とするものであった。

今やエニオン銀行は米国の銀行のビック10に入り、誰も日本の銀行とは思わないほどに成長している。



小樽中学5年生当時



現在

第82期（昭和63年卒）同窓会の開催報告

平成から令和に変わった9月15日（日）、晴天の中、昭和最後の卒業生である私たち第82期は、母校の同窓会記念会館で同窓会を開催いたしました。

思えば2年前、東京組の同期と50歳の記念にぜひ全国規模で、小樽で同窓会をやりたいね……。という一言から始まりました。東京組だけでなく、地元の小樽組の仲間からも賛同協力を得て足かけ2年かけて開催の運びとなりました。卒業から32年が経ち、出席人数も不安でしたが、当日は、同窓会責任者の小田康子先生を始め、太田常喜先生、大槌甫之先生、渡辺隆先生、大野二弘先生、星一郎先生（第2部より）の合計6人の恩師にご出席いただき、同窓生も総勢101名、道内はもとより関東・関西などの全国からだけではなく海外からも足を運んでくださり、大盛況の会となりました。

前日、幹事十数名が母校に集まり、打ち合わせと椅子のセッティング・ピアノの調律・懐かしの校舎見学ルートの再確認などを行いました。



32年ぶりの再会でしたがあつという間に18歳の頃に戻り、まるで潮陵祭の準備をしているような気分でした。前日は同窓会責任者の小田先生には大変お世話になりました。

当日は晴天に恵まれ、過ごしやすい秋晴れでした。集合場所は懐かしの教室です。9時半にHRを行い、懐かしの校舎見学ツアーを実施しました。これは一部から「久しぶりに校舎を見たい」という声があがり、現役高校3年生が受験模試実施日にもかかわらず、学校長から校舎使用許可をいただき、実施にこぎつけました。体育館、教室、職員室、図書室など青春時代に過ごした校舎をまわりました。ツ

アー中、懐かしさとおしゃべりでなかなか移動がスムーズにいかず大変でしたが、みな喜んでもらえて良かったです。

校舎見学ツアーの後は、記念館にて各先生方より、当時の心に残ったエピソードや現在の様子などをお話していただき、久しぶりに先生の授業を受けているような懐かしさを感じました。

先生方のお話の後は、現在プロのピアニストとして活躍中の田中宏明君のミニリサイタルと、懐かしの校歌を合唱部の音頭で、全員で斉唱しました。最後に校舎の前で集合写真を撮り第一部は終了となりました。

第一部終了後は、各自懇親会会場の「小樽ニュー三幸」に向かいました。懇親会からは星一郎先生を始め、7名の方々が新たに参加してくださいました。卒業して32年ぶりの再会でしたが、全然変わらない人……ちょっと変わった人……誰だかわからない人……色々でしたが、「私たち在学习中こんなに仲良しだったっけ？」と思うほど、みなおしゃべりに夢中で、おいしい料理がほとんど減らない状況。さらに、同期の川端君と渡辺さんのご主人の会社からの協賛、日本酒「上川大雪」を大量にいただき、みな大いに盛り上がりアツという間の2時間でした。

大いに盛り上がり、懇親会で帰る予定だったメンバーも名残惜しいのでしょうか、3次会30名を予約していましたが、60人参加。ギュウギュウ詰めの中、まるで高校生のように楽しい時間を過ごしました。その後、4次会・5次会と続き最後に残った面々は朝帰りだったようです。酔った勢いで、次回60才の幹事も決まり、10年後が楽しみです。

準備から支えてくださった幹事の皆さん、参加された皆さん、本当にありがとうございました。

代表幹事：柳原（旧姓井上）文（82期）



教室で HR 中



校門の前で



記念館で太田先生と



校舎見学中



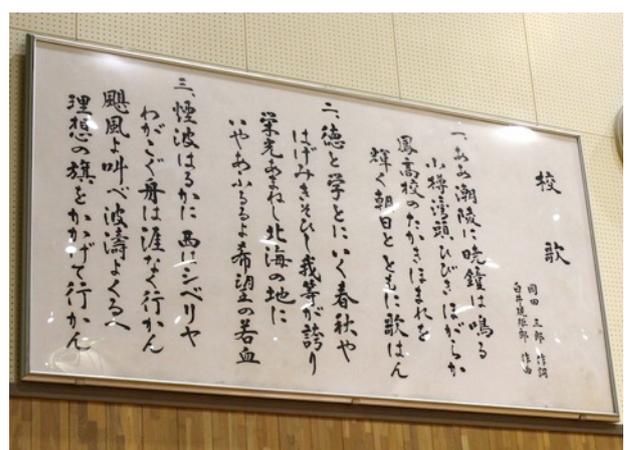


恩師の話を真剣に聞いてます・・・。

田中君のミニリサイタル



先生方に花束贈呈



全員で校歌斉唱



川端君から日本酒の説明



星先生からのお言葉





幹事一同



総勢 101 名 + 先生でハイ・ポーズ！



第3部 樽男にて



橋本 真澄さん(82 期)、小木曾 晃貴子さん(82 期)、梅津 里織さん(82 期)の自己紹介が行われました。

また、ダンディー柴田さん(71 期 柴田 剛さん)のお笑い講演 ～潮陵・小樽の「おや、まあ、へえ」～が行われ、地元になんだ楽しい話題とともに、総会出席者の潮陵高校時代の若き写真を ユーモアたっぷりで披露していただきました。

楽しい時間もあっという間に過ぎて終了時刻の 17 時が近づき、最後に、全員で校歌を斉唱したのち、恒例により、出席者最年長の山田 宏さん(45 期)の音

頭による一本締めと 出席者全員による記念撮影で閉会となりました。

なお、おみやげのマロンコロンとおたるワイン小瓶は、あまとうの柴田 剛さん、北海道ワインの寫村 公宏さん(74 期)に協賛いただきました。柴田 剛さんは、潮陵記念館に向いて総会出席者の高校時代の写真を集めるなど、万全の準備をして札幌から駆けつけ、歓迎会を盛り上げてくれました。また、開催にあたり多くの方々よりご寄付を頂戴しました。厚くお礼申し上げます。



同釜会（おなかまかい）報告

同じ釜の飯を食べ、親睦を深める忘年会として2014年より始めた同釜会（おなかまかい）も今年で6回目。昨年まで3年連続、横浜中華街で開催していましたが、今年は、趣向を変えて、品川区中延の老舗料亭で開催しました。11月30日土曜日に、46期から82期まで、初参加者11名を含む総勢36名の同窓生が参集し、会席料理を堪能しました。

同釜会は柳原文副会長（82期）の司会で始まりました。

初めに6月の総会で就任した今日出夫会長（67期）の開会挨拶があり、8月最終土曜日に約230名が出席してグランドパーク小樽で開かれた潮陵倶楽部総会の様子が報告されました。総会では、在校生から選抜され、潮陵倶楽部の支援でニュージーランドに留学した2名の女生徒からの英語スピーチもあり、潮陵ってやっぱり凄いと感じたとのことです。

続いて、福井早枝子さん（65期）の合唱指導で、全員で校歌を斉唱し、小樽会会長の清水川 洽二さ

ん（52期）の乾杯のご発声を合図に、歓談、交流が行われました。

歓談の間には、今回初参加、久々参加の宮本和明さん（47期）、南澤良夫さん（67期）、青柳裕子さん（71期）、岩永礼子さん、齋藤悌二さん、臼井素子さん、角田敬規さん、寺田匡宏さん、平田ひろみさん、深浦康子さん、三上博司さん、嶺野恵さん、山岡由美子さん（以上73期）から自己紹介、近況報告を頂きました。

会の様子は、写真をご覧ください。

飲み放題で盛り上がる中、あっという間に時間となり、恒例により、参加者最年長の46期本間佳さん、布施市蔵さんの三本締めで閉会となりました。新しい仲間を迎え、美味しい料理とお酒、気兼ねないおしゃべりの、楽しいひとときでした。

73期の皆さん、大勢でご参加いただき、ありがとうございました。次回も、お待ちしております。





『私は今』 近況 1 (令和元年6月の総会案内時の近況連絡より)

【35期】村住 恒雄 (小平市) なんとか元気で暮しております(100歳)

【39期】亀 昌治 (横浜市) 大正15年生まれの93才です。少々体をいためて現在は療養中ですので 大好きな酒の会で一杯がやれないのが残念です。昭和23年に東京の油脂を取扱う会社につとめ 50年間程 研究生生活をしていました。

【42期】田代 武雄 (藤沢市) 健康で正常に暮し生活しています。同会の発展を望みます。

【43期】間所 一郎 (我孫子市) 足腰が弱り残念ながら欠席します。小樽在住の姪から送られた「おたる案内人」(小樽観光大学検定試験公式テキストブック)で北前船文化などを勉強しています。

【44期】道上 進 (中野区) 体調も良好。相変わらず卓球を楽しんでいます。

【45期】山田 宏 (武蔵野市) 小生87歳になりました。至って元気です。伊豆300坪山荘の庭作りに喜びを感じています。

【46期】川越 重義 (横浜市) 所属俳句結社の全国大会と重なり、残念ですが欠席させていただきます。小生、俳

句に絵にと、頑張っていますが、そろそろ終活も考えねばと思って居ります。会の盛会を祈ります。工藤 孝友 (札幌市) ご連絡有難うございます。又、皆様方にお会い出来る事、楽しみに致しております。中山 茂博 (横浜市) 見た目は変わりませんが、現在、抗がん剤投与している最中です。しかし、日常の家事は十分に果しているつもり。何も気にすることでは無い。今回は久々に出席します。布施 市蔵 (小平市) 87歳なりに元気にしております。先日、TVで小樽の浜が鯉の「くき」で白くなっているのを見て、昔をなつかしく思い出しました。70年も前の事です。本間 佳 (横浜市) 志賀高原へ3年振りです。スキーをやってきました。来シーズンは88歳のスキーを北海道でと願っています。渡辺 光三郎 (横浜市) なるべく外出するようにしております。今年、小樽で6月に行なわれる有志の同期会にも横浜から出席する予定です。

【47期】上野 淑子 (横浜市) “21世紀に・小樽運河” 私が作った小樽への応援歌を取り上げて下さい。YouTubeに入っています。金子 明石 (松戸市) 毎回御案内いただきありがとうございます。毎年何かが起こり入

院してます。その都度筋力が弱まり、現在、杖をたよりにヨタヨタ歩きです。宮本 和明（大和市）今年四月、彼のお蔭で、はしなくも櫻咲き誇る京洛の地を訪れる望外の喜びを得た。彼、豊嶋三千春兄はかの金剛流の家系を辿ると先祖は鎌倉在住時、平清盛の命により平氏崇敬の巖島神社へ、平氏滅亡後 京へと。父も伯父金剛永謹も人間国宝。院時代 母校で専攻の違いはあるもののある機会に知遇を得、息子や娘の結婚には祝意を。東京千駄ヶ谷の国立能楽堂での彼の能楽を観る機会多々。娘と共に楽屋へも。爾来 交際 60 年余。このたび四月七日祝賀の宴に列席。金剛流・大蔵流の人間国宝あまたの『「豊嶋彌左衛門」襲名披露及び旭日双光章受賞祝賀会』に 300 余名と共にしばし祝意を表す。またかねての望みを果たす。洛南郊外の地、下の鳥居から徒歩の石段上下 1000 段乗り切り、上の本宮石清水八幡宮の桜に清少納言を偲ぶ。また京都御所内の京都迎賓館を見学その凝らされた日本美にしばし時を忘れる。桜の京に美に優る日本を知る機会に感謝。これも彼との縁か。機会を得て御所西側に位置する金剛流能楽堂で襲名後、いやます光の彼が奏でる荘重典雅な能楽美に酔いしれたい思いが日に日につのる。如何にせんや。

【48 期】村上 締子（中央区）何時もお便りをありがとうございます。身体不調子の為欠席させていただきます。

【49 期】田中 穰二（前橋市）会報 15 号ありがとうございました。いろいろお世話になります。よろしくお願いいたします。

【50 期】蛸島 義弘（入間市）祈る盛会！ 健康に感謝す。寄稿拝読、感心！

【51 期】大木 恵子（浦安市）変わりなく元気に過ごしております。上諏訪 一明（川崎市）事故後の回復がままならず歩行に不自由しています。北 正明（川崎市）立派にやっていると。この事務局及び会は伝統と実績あります。大変ですが、続けて下さい。佐々木 允明（横浜市）病気療養中のため欠席させて下さい。野田 徹（さいたま市）毎週（水）と（土）に町内会のグランドゴルフに参加して居り、成長の早さに自分でもビックリ！原 絢一（さいたま市）片岡校長の進学実績及び部活の報告、楽しく拝読させていただきました。中野 政一（茅ヶ崎市）会報 15 号懐かしく拝読致しました。体育系の活躍を期待しております。盛会を祈ります。

【52 期】金久保 龍太郎（さいたま市）校友の訃報に接する回数が年々増えてきました。寂しい限りです。同期会で「傘寿を祝う会」を 6/12（於 小樽）開催の予定。参加者約 90 名。話題の中心は「人生 100 年時代」か？

【53 期】日下部 直美（吉川市）同期会は、毎年、東京在住の方を中心に、50 人前後で池袋で開催して居ります。佐藤 眞（厚木市）アスレチッククラブで体を鍛え、月 1 回の国内外の旅行。玉置 一男（上尾市）60～70 年前の小樽がなつかしい。堀内 昭忠（春日部市）卒後 60 年（53 期）小樽での定期集会解散予定。都

合をつけて参じたい。松原 諄也（府中市）加油鈴木 松井 吉村 謙中露韓北及立共由 嗚呼!? 佐味喜美（川崎市）元気で居ります。町内会役員や、グランドゴルフと、忙しくして居ります。

【54 期】北原 正友（富士見市）悠々自適とはいきませんが町会活動など何かと忙しく過ごしております。都留 正昭（横浜市）2 月に横浜、鎌倉在住の同期生 4 人で野沢温泉でスキーを楽しみました。来シーズンも北海道を含めて何処かで滑りたいと話合っています。（何年か前に同じメンバーでニセコへ行きましたが、猛吹雪で一度も滑らずに帰って来た苦い経験があります。）山や海の実しさ、スキーの楽しさを教えてくれた小樽の町に感謝です。会報誌を毎回楽しみにしています。大浦 辰次郎（練馬区）早大を出て新聞記者になる夢を断念し畑違いのエクソ線応用の精密機械製造販売業に就職 40 数年の現役人生でした。しかし、小樽を出て中央で活躍したいという夢はかなえられたかなと思える現在です。潮陵スピリットで頑張りました。時々母校の校舎を仰ぎ見て希望に燃えた頃を思い出しています。潮陵時代は楽しい青春です。藤田 幸久（横浜市）趣味の創作を楽しんでいます。英国ミステリー・シリーズ（22 冊）、英国歴史物語（6 冊）、エッセイ（5 冊）の計 33 冊になりました。Amazon Kindle 本（電子図書）に発表しています。山舘 博康（茅ヶ崎市）会社での仕事も 75 歳にて退任。社会への貢献も終わりになりました。恐縮ですが総会に参加を失礼します。

【55 期】駒野 近子（鎌倉市）いつも、いろいろとお世話様でございます。有難うございます。長年続けている習い事をなかなか整理出来ず、忙しくしています。

【56 期】加藤 義雄（上尾市）体調が今一步のため欠席。ご盛会お祈り申し上げます。来年は北海道で喜寿同期会が楽しみです。それまで体調 up します。是安 克彦（掛川市）この 3 月で仕事（パート）を辞め、現在は町内のカラオケクラブと麻雀クラブ（健全）で楽しんでおります。

【58 期】齋藤 修一（江東区）お世話くださりありがとうございます。会報 15 号と定時総会の案内をお送りくださりありがとうございました。定時総会は、予定が入り欠席いたします。会報 15 号は立派な内容ですね。「堀喜久子様」の文章・内容に感動しました。ますますのご活躍をお祈りいたします。眼の輝き・顔とりわけ頭の感じは少し白くなっただけで昔のからの若々しさを感じます。

【59 期】齋藤 健三（宇都宮市）毎年特に変わりはありません。月 2～3 回の健康ゴルフとコンサート、歌舞伎等を楽しんでいます。堀 喜久子（秦野市）在学中は音楽部に在籍していました。看護師です。

【61 期】梅村 勝（練馬区）2018 年 10 月、61 期の同期会を池袋サンシャインでやりました。とても楽しかったです。牧野 年（さいたま市）昨年、8/末で退職。現在週 3 日のボランティア活動に精を出しています。

【62 期】前野 一夫（千葉市）昨年春に木更津高専校

長を停年となり、昨年 4 月より日本工学院専門学校にて校長(八王子校長兼任)をしております。大学院・大学・高専・専門学校と多くを経験することになりました。山崎 秀樹(茂原市)妻の介護の為に、出席出来ません。

【63 期】竹田 信一(横浜市)別件が有り欠席となりました。ご盛会を祈念しております。相変わらず非常勤顧問の仕事が続けています。そろそろ終了する予定です。成田 芳生(練馬区)盛会をお祈りいたします。

【64 期】佐々木 聡(春日部市)コンサルタントとして組織力向上のための研修に取り組んでいます。志佐 隆司(守谷市)現在は、一般社団法人国家ビジョン研究会の医療部会に参加。医療改革、医療関係者の教育制度改革など議論。ジャーナリスト的観点で取材のつもりで病院の救急外来夜間受付に勤務し抜けられず、はや、5 年。ビデオ作品を作りながら、何かしら、生きがいを探しながら、毎日を過ごしています。

【65 期】安藤 治(狭山市)6月8日の会には、是非参加させていただきます。7 月に北海道へ転居予定、皆様との再会を楽しみにしております。田村 類(大津市)2019 年度も会員にさせていただきます。また 65 期の同窓生が多数出席する会には参加したいと思っています。皆様お元気で。広瀬 清(狭山市)社会人現役を引退したら、480 世帯マンションの自治会副会長に選出され、会議・イベント・日常活動などで多忙です。総会の盛会を祈念しております。松屋 桂子(藤沢市)在学中は軟式テニス部に在籍していました。現在は絵画の講師をしながら水彩画などを描いています。南澤 孝夫(浦安市)最近パークゴルフを始めました。これが、奥が深く面白いです。今は、ゴルフとパークゴルフと山登りと毎日の読書が楽しみです。

【67 期】神山 実樹(さいたま市)還暦記念に受験し、大学生になりましたが、早いもので今年 4 年生になりました。芸術系の学部なので土日は単位の絡むイベントが多く、8 日の総会に出席できず残念です。盛会をお祈り申し上げます。山平 透(春日部市)定年まであと 1 年ほど。毎日をどう過ごそうか楽しみと悩みが交錯します。決まっているのは、年に一度は女房と旅行に行くことだけ。

【70 期】東野 敬則(川崎市)昨年 3 月に定年退職、翌 4 月から新しい職場(東京都内)にて第二の就職しました。

【72 期】五十部 雅代(つくば市)ご案内ありがとうございます。あいにく都合が悪く欠席です。週 1~2 回、理科支援員として市内の小学校に行っています。白鳥 雅裕(横浜市)当日は私が所属する合唱サークルの定期演奏会の予定があるため、参加出来ません。昨年 11 月に次いで 2 回目となり曲目のレパートリーも増えて週末を中心に練習しています。子供たちも大きくなって長女は今春大学を卒業し海外に行く予定です。

【73 期】大町 宏志(昭島市)今年は 6 月 8 日休みではないです。この 4 月 日光で十年ぶりに全日本 OL 大会

に参加し、週一、立日橋、多摩大橋間 8k 位をジョギングし始めたところです。清水 俊之(さいたま市)残念ながら当日は小樽へ帰省しております。中村 裕之(千代田区)昨年 9 月に文部科学大臣政務官の任を拝命し、公務と政務に忙しくも充実した日々です。山岡 由美子(西東京市)今回は旅行日程と重なり欠席させていただきます。会のご盛況をお祈り申し上げます。

【74 期】浅田 敏裕(柏市)現在、勤務先にて購買業務に奮闘中です。今回は所用にて参加できません。

【75 期】杉中 雅博(横浜市)初参加です。(在学中のサークル)社会研究、生徒会広報部。(趣味)ジョギング、釣り。(職種)会社員。瀬戸 浩勝(世田谷区)初めて参加させていただきます。私は潮陵高校へは、余市から汽車通学をしていました。部活は特に入っていませんでした。新潟大学に進学し、道内の銀行に就職その後破綻、現在は都内にある私立中学高校で事務をやっております。趣味はロードバイク(自転車)に乗ることで

す。【79 期】尾上 めぐみ(大田区)いつもお世話になっております。残念ながら、予定が合わず、不参加とさせていただきます。盛会を心よりお祈り申し上げます。

【81 期】福田 洋(中央区)順天堂医院(総合診療科)にて勤務しています。

【82 期】梅津 里織(川崎市)娘たちが、大学受験生と就活生ですが、だいぶ手が離れたので、障害児のお世話を仕事でしています。小木曾 晃貴子(横浜市)小樽を離れて 25 年。現在は横浜で医療事務をしております。下の息子が今年就職し、子供二人とも手が離れホッと一安心というところです。休みの日は、山登りでリフレッシュしています。橋本 真澄(大田区)子ども中心の生活から卒業し、自分の時間が持てるようになりました。人生後半の生き方模索中です。柳原文(小金井市)在学中は、合唱部にいました。品川区にある私立中学高等学校で英語の専任教員 24 年間しております。大学生の娘と中学生の息子がいて、まだまだ手がかかりますが、なんとか両立頑張ってます^_^

【85 期】窪田 晶子(中央区)土曜日は仕事の都合がつきにくく、残念ながら今年も歓迎会を欠席いたします。音楽を生業として近年は北海道や東京、パリで活動しています。殺伐とした現代社会の中で音楽の役割とは? 日々自分に問いかけています。

【90 期】梶 陽宏(浦安市)潮陵では坊主にしたくないとの理由から軟式野球部で汗を流しておりました。高校卒業以来 20 年以上野球から遠ざかっておりましたが、息子(現在小 1)が野球を始め、坊主にしないで良い高校に進学予定であり、考え悩む事なく甲子園目指して日々二人三脚で奮闘中です。

【95 期】岩間 世界(熊本市)学部時代に同じ部活で活動していた後輩の結婚式と重なってしまったため、欠席させていただきます。今夏も小樽で実験や工作教室を行います。お時間あれば覗きに來てください。

【43 期】山口 保 (世田谷区) 終戦後 海軍兵学校より帰郷しましたが、軍学校入学の為 一年生転校を拒否されたので、友人も少なく欠席。卒業時は五年一組級長、応援団長でした。二高、東大と進学。

【46 期】川越 重義 (横浜市) 当日旅行の予定があり、残念ですが欠席させていただきます。小生 90 歳を目前にして尚 趣味に勤しんで居る昨今です(俳句、水墨画)。工藤 孝友 (札幌市) 6 月の総会には頑張ってお席しようと思っております。ご盛会を祈念しています。島 雄一 (横浜市) 体調不良につき 今回は欠席させていただきます。中山 茂博 (横浜市) 体調不良につき欠席致します。布施 市蔵 (小平市) 身体のあちこちに「ガタ」が来ておりますが 一応元気です。今年も同期会出席の為 小樽に行っておきました。本間 佳 (横浜市) 今年 6 月に 46 期の集まりで小樽へ行って来ました。29 名の出席でしたが、東京・横浜から 5 名が参加しました。森 徹 (流山市) 小生 元気に過ごしています。4 回目の運転免許の認知機能検査を近くやります。

【47 期】上野 淑子 (横浜市) 日頃 お世話を頂き有難く存じます。当日 結婚式参列のため欠席させていただきます。杉山 桂子 (中央区) ご案内いただきありがとうございます。お陰様で無事な日々を過ごしております。宮本 和明 (大和市) 「縁と絆の会、事例此処にあり。我が小樽潮陵樽中会も。」招待を受け、心待ちの『石上露子没後 60 年記念のつどい～現代によみがえる露子、そして晶子～』が富田林市で 10 月 13 日(日)開催される前日、台風 19 号は東海・関東地方に 10 月 12 日(土)から 10 月 13 日(日)にかけて甚大の被害の痕跡を救い難いほど悲惨な形で残した。13 日朝出発も危ぶまれる中、情報収集、午前中小田急線も停止。東海道新幹線始発は無理だがあとは運行可能情報。迂回の末、新横浜発新幹線に飛び乗り、開演午後 13:30 の 20 分前に満員御礼の会場に到着した。先の没後 50 年の時の顔触れは 18 名のみ。再会の挨拶を交わす。基調講演は筑波大出の脚本家・演出家で評論家・小説家として爾来 100 件を超える八面六臂の活躍ぶりの藤井清美さん。題名は「露子と晶子、愛の選択」爽やかな音声とノーブルで端麗な容姿は会場を魅了し観客を包み込んだ。打ち上げ会を後にして、別宿で、会の正副代表と小生に藤井清美さんを交えた文芸談義は富田林の秋風に香り立つ残影の得難い思い出。翌日早めに、副代表が小生を 10 年ぶりに花を手向け参拝希望していた石上露子親子の永眠の高貴寺の墓所へ導いてくれた。次に、楠木正成ゆかりの場所へ。正成 8 歳～15 歳の学問所・首塚・国宝・重文の檜尾山観心寺。楠公神社、建水分神社、千早赤阪村立郷土資料館と郷土知識豊かな解説を受けつつ案内の

紅葉今だしの旅路。最後は、観光客の多くが辞退する急坂絶壁の城址登頂へ。夜来の雨は足場を閉ざす。濡れている旧弊な石段、標高 673m の千早城址登頂に挑戦。先ず登坂入口は急坂石段、途次曲折の崩れ段、すれ違ふは二人一組のみ、たじろがず 2 度・3 分間ほど小休止し登り切る。山頂の城址にまばらに 5 人。眼下遙かに 1 千人の手勢で数万人を超える幕府軍と 100 日に及ぶ往時の激しい攻防戦の歴史を偲ぶ。帰路は回り道を選ぶ。石上露子が縁と絆の心楽しい文芸・学芸旅行であった。

【48 期】村上 締子 (中央区) 身体不調の為 欠席をいたします。何時もお通知をありがとうございます。

【51 期】上諏訪 一明 (川崎市) 週 1 の老人会でワイワイやっております。大木 恵子 (浦安市) 元気にしております。佐々木 允明 (横浜市) 昨年 膵臓癌の摘出手術を受けました。これで、「ガン持ち仲間」に入ることができました。谷口 勲 (町田市) 5 年ほど前に、急性心筋梗塞、洞機能不全症候群、気管支炎で緊急入院し、左冠動脈 2 本にステントを入れ、ペースメーカーを埋込み、身体障害者に認定されましたが、その後、心臓の方は順調に推移しており、現在 81 歳になります。80 歳を過ぎた頃より、肝臓や腎臓に関する数値も高止まりしていますが、お蔭様で、年齢相応に元気に暮らしております。野田 徹 (さいたま市) 10 月 22 日に潮陵 7 期東京同期会が有り、北海道からの 7 人を含む 29 人が参加して楽しい時を過ごしました。原 紬一 (さいたま市) 元気に卓球を楽しんでおります。

【53 期】玉置 一男 (上尾市) 卒業以来 上京し 60 年、早いものですね。当時の小樽生活は わびしかったがなつかしい。姉妹弟は札幌です。花園町会長は友人です。佐味 喜美 (川崎市) 週 2 回グランドゴルフに参加したり、元気で居ります。鷲巣 みち子 (さいたま市) 体調不良にて出席出来ません。

【54 期】藤田 幸久 (横浜市) 英国を舞台とするミステリー、歴史物語、エッセイを書いています。34 冊になりました。創作を楽しんでいます。Amazon に発表しています。山舘 博康 (茅ヶ崎市) 会での老齢 75 歳を上回り、78 歳になっておりますので、皆様に役立つ年齢を超えました。それゆえ、ご遠慮いたします。若い人たちの会で、現潮陵の若人を応援して下さい。

【58 期】堀米 昇士朗 (鳩山町) カンボジア在住のため欠席させていただきます。

【60 期】柳田 眞典 (葛飾区) 60 期同期会が 11 月 10 日に金沢旅行を兼ねて石川県片山津温泉で開催されます！参加予定です！

【62 期】武田 立 (墨田区) スカイツリーの麓に転居して、もうすぐ 1 年。週 1 回のアルバイトで、1970-2000 の

産業史を著作しています。

【63期】四十物 実（柏市）同釜会 2019 参加できずに残念です。1969年第63期卒同期会の近況です。2019年9月14日 第63期 同期会が小樽で開催され、今回を最終会とするとの案内もあり20%近い、100人を超える人たちが集まりました。鴨志田先生、紺谷先生、秋山先生もご参加くださり盛会に、卒業50周年の最後の同期会が行われました。先生方もお元気でしたが、我々は年が明けると、古希を迎えます。まだまだ元気な年寄りの集まりでした。東京の同期会は、やめる止めるといいながら、20人近く参加して年2回集まっています。小樽では、同期会は招集しないが、「パークゴルフ、ゴルフの集まりは続けていこう」との声が上がっています。世の中への恩返しをする前に、死ぬわけにいきませんよね。小樽潮陵高校の益々の弥栄を祈念しております。佐竹 茂市郎（立川市）大学の同窓会、税理士会の活動など、色々なボランティアをしています。

【64期】佐々木 聡（春日部市）3年前に31年間勤務したコンサルティング会社を退職し独立。マネジメント研修を中心としたコンサルタントとしてやっています。また2年前からクライアント企業の社外取締役としてコーポレートガバナンスに携っています。 菅 孝二（渋谷区）マンションの管理組合の理事会や防災訓練などがあり、出席できず とても残念です。

【65期】佐々島 宏（世田谷区）残念ですが、30日は欠席させて頂きます。前より、土曜日は社会人大学院のメインの日で、30日は、第3クォーターの発表日で、発表が早ければ出席も検討していましたが、昨日、不可能が分かりました。滝沢 純（坂戸市）趣味はゴルフを少々。最近 YouTube で昔の懐かしい歌を聴いています。仕事は自動車メーカーの研究所で主に鉄鋼材料専門。5年間中国駐在、それが縁で定年後は家具メーカーで品質アドバイザー、月一回程度中国・東南アジアの提携工場で品質管理の仕事をしています。週4回痛い膝を引きずりながら満員電車で東京の本部に通勤していますが、いつまでできますか？ 田村 類（大津市）今回はタイミングが合わず欠席します。健康なうちに、同窓会にはできるだけ参加させていただきたいと思っています。皆様のご健康を祈念申し上げます。

【67期】黒坂 則昭（板橋区）いまだ、仕事は続けて

おり、おかげさまで忙しい日々を送っています。小樽には、すでに実家もなく、帰る機会がめっきり少なくなりました。故郷を離れ45年を過ぎてもなお、小樽の、あの坂や、そら、海、雪などが恋しくなります。年を取った証拠でしょうか… 今日出夫（横浜市）昨年から日本橋兜町の監査法人で事務局長してます。70歳まではフルタイムで働く予定です!! 潮陵時代は軟式テニス、現在はバドミントンしてます。 南澤 良夫（稲城市）令和元年8月、定年退職により13年11ヶ月に亘る生まれ故郷小樽への単身赴任生活にピリオドを打ち帰京しました。潮陵では卓球部でした。 横山 和子（中央区）11/27~12/1までドイツで開催される国際学会に出席している為 残念ながら欠席します。

【69期】柏倉 恵造（足立区）6月よりアーバンツーリストに勤務しております。旅行会社です。

【71期】青柳 裕子（中野区）同期の迫俊哉さんが昨年8月小樽市長に初当選しました。彼が東京に来る機会に 関東の同期生達も集まる事がふえました。

【72期】白鳥 雅裕（横浜市）羽田空港国際線ターミナルの拡充に伴い忙しい日々を過ごしています。生憎当日は韓国へ旅行する日と重なり出席できません。昔の勤務先が会場の近くにあり懐かしく感じました。

【73期】大町 宏志（昭島市）11月上旬の三連休中、団地敷地内樹木せん定を自治会員として手伝わされました。抑留されたかのようにきつかったです。 清水 俊之（さいたま市）2020年 定年をむかえます。 三上 博司（横浜市）初参加です、宜しくお祈りいたします。余市町出身です。兄も潮陵卒で、69期です。小樽商大卒業後、埼玉銀行(現りそな銀行)に勤務。6年前に退職し、現在はりそな銀行系列の倉庫会社に勤務し、保存文書の保管営業をしています。 中村 裕之（千代田区）衆議院議員として3期6年がたちました。昨年10月から本年9月まで文部科学大臣政務官を拝命致しました。

【74期】和田 一男（渋谷区）新卒で入社したリクルートを卒業し、コンサルティング会社を立ち上げて、2020年で20年目を迎えます。経営支援、営業強化、人事機能強化、人材育成のコンサルをやっています。いよいよ60歳直前となり、後進育成をテーマにノウハウ継承していきます。

訃報 謹んで哀悼の意を表し、ご冥福をお祈りいたします。

中山 保人 (37期)	平成30年12月	早見 弘 (43期)	平成30年9月	水上 忠臣 (50期)	平成30年5月
乾 学 (38期)	平成31年3月	笹田 豊茂 (45期)	平成28年8月	堀内 昭忠 (53期)	平成28年8月
藤野 破摩雄 (39期)	平成30年11月	松橋 健司 (45期)	平成31年3月	佐藤 弘道 (59期)	平成30年1月
河原 順二 (43期)	平成31年2月	柏谷 一明 (47期)	平成29年5月		

(平成30年度総会以降に訃報のご連絡を頂いた方々)

東京潮陵樽中学生会報「潮陵」第16号の発行に際し、母校の近況についてお知らせします。

◎全日制

各学年6クラス、1年241名、2年239名、3年232名の、全学年で男子360名、女子352名、計712名の在籍でスタートしています。

【潮陵祭】

第72回潮陵祭は、“上げ潮”をテーマに7月5日～7日の3日間にわたって行われました。サンモールでのパフォーマンスも好評で、多くの市民の方々に見ていただきましたし、食堂などのクラス企画にも多くの来場者がありました。道内では多くの学校が平日を含めた金曜日・土曜日などの2日間日程の学校祭にしています。伝統校ならではの3日間学校祭です。

【部活動】

体育系部活は、支部大会で7部が次の通りの成績を収め、全道大会に出場しました。

○弓道(男女団体優勝※女子5連覇、男子4連覇、男子個人3位、女子個人1位～3位) ○テニス(女子W3位、女子S2位) ○軟式テニス(男子W2位) ○卓球(女子団体優勝※3連覇、男子W1位、男子S1位2位、女子S1位3位) ○バドミントン(女子団体優勝※7年ぶり、男子S3位、女子W1位3位) ○陸上(学校対抗男女総合優勝、男100m1位(大会新)、男200m1位(大会新)他18種目で1位) ○山岳(最優秀賞)

また、全国大会に進んだのは、次の部活動と個人でした。

○陸上(7年連続 2年女子走り幅跳び) ○水泳(3年連続 3年男子50m100m自由形) ○自転車競技(1年男子) ○ボート(3年男子 国体選手)

文化系部活動は、次の部活が全道大会に出場しました。

○放送局(支部大会で12年ぶりの総合賞)

また、全国大会に、次の部活が出場しました。

○文芸部(全国高等学校総合文化祭、俳句甲子園) ○新聞部(全国高等学校総合文化祭)

この他、吹奏楽部定期演奏会が6月22日に小樽市民会館で、音楽部定期演奏会が9月22日に小樽市民センター

マリナーホールで、それぞれ行われました。演劇部は、潮陵祭と10月5日に行われた高文連地区大会で熱演を披露しました。

【ニュージーランド語学研修】

2年生女子2名が、7月20日から2週間の語学研修をニュージーランドのダニーデン市で受けました。夏休み後の全校集会や、潮陵倶楽部総会で研修報告をしてもらいました。充分に楽しみ、また内容の濃い2週間だったようです。

◎定時制

1年8名、2年9名、3年5名、4年2名、全学年で男子10名、女子14名、計24名の在籍でスタートしています。

卒業予定は、4年2名の他、3年1名です。昨年度は3年6名のうち4名が三修制で卒業し、2名が残ったので、今年度は四修と三修の人数比が逆転したと言えます。

定時制の学校祭、潮定祭が9月27日に行われました。今年は装飾用の壁画を作ったり、学年別のクラス企画に取り組むなどしました。

◎北海道立学校ふるさと応援事業

さて、北海道教育委員会は今年度から、『北海道立学校ふるさと応援事業』を開始しました。これはふるさと納税制度の学校版と言えるもので、この事業に寄付すると、寄附額の1/2を指定した学校の教育活動に活用し、残りの1/2を全道の学校の教育活動に活用するというものです。本校も、「小樽市姉妹都市ニュージーランド・ダニーデン市オタゴ大学での語学研修への派遣」と「ICT環境の整備による学習環境の充実」の2つの事業で参加しています。本校にはすでに潮陵教育振興会という寄付事業があり、現役保護者の方々を中心に寄付をいただいているところです。その上にこの道教委事業に参加しているのは、遠隔の方で小樽潮陵はもちろん北海道教育を広く応援したいというお志に応えるためのものです。

本校だけを応援したいという方は潮陵教育振興会へ、他の学校も応援したいという方は北海道立学校ふるさと応援事業へ、寄付をお願いできれば幸甚です。なお、道教委事業は「北海道立学校ふるさと応援事業」で検索すると出てきますし、本校に電話でお問い合わせいただいても結構です。返礼品は、生徒会誌『鳳』なんていうのはどうでしょうか？



入学式当日掲揚校旗



6 月球技大会卓球【全日】



潮陵祭演劇公演【全日】



潮陵祭サンモール【全日】



音楽部定期演奏会【全日】



潮定祭クラス企画【定時】

年会費納入と寄付・広告協賛のお願い／事務局より

東京潮陵樽中会は、昭和 33 年に発足以来、諸先輩の支援を得て 62 年目を迎える歴史と伝統を誇る広域関東圏在住者の同窓会です。小樽同窓会との連携、母校支援・同窓支援につながる活動の具体化を目指すとともに、本会の継続・発展のため若手会員獲得に努めているところです。

本会の運営は会員諸氏の年会費 一般 2,000 円(75 歳以上無料)、学生 1,000 円と、寄付、広告協賛金によって支えられています。しかしながら、近年は、これらの収入が減少し、活動に支障をきたしています。

つきましては、この現状をご理解いただき、75 歳未満の会員の皆様には、**年会費の納入**をよろしくごお願い申し上げます。また、75 歳以上の会員の皆様にも、**寄付金のご支援**をごお願い申し上げます。

納付方法ですが、次の(1)～(4)いずれかの方法で振込みをお願いいたします。なお、振込みの際、通信欄・連絡欄等には**会費・寄付の別、卒期、e-mail アドレス**を記入いただくと助かります。

また、広告協賛につきましては、事務局までご連絡をお願い申し上げます。

(1) ゆうちょ銀行の払込取扱票による振込み

- ① 払込取扱票の口座記号「00180-8」
- ② 払込取扱票の口座番号「61069」を右詰で記入
- ③ 加入者名「東京潮陵樽中会」

(2) ゆうちょ銀行からの振替(記号番号で電信振替)の場合

- ① 送金先口座は「00180-61069」
- ※ 払込取扱票での口座記号末尾「-8-」は不要

(3) ゆうちょ銀行からの振替(店名で電信振替)の場合

- ① 店名は「ゆうちょ銀行〇一九(ゼロイチキユウ)店」
- ② 口座種別は「当座」
- ③ 送金先口座番号「0061069」

(4) 他の金融機関(ゆうちょ銀行以外)から振込の場合

- ① 銀行名は「ゆうちょ銀行」
- ② 店名は「〇一九(ゼロイチキユウ)店」
- ③ 預金種目は「当座」
- ④ 口座番号は「0061069」

払込取扱票		振替払込請求書兼受領証	
00	口座記号・番号はお間違えのないよう記入してください。	001808	61069
001808	金額	2000	2000
東京潮陵樽中会	加入者名	東京潮陵樽中会	東京潮陵樽中会
〇〇	※会費、寄付等の費目を記入ください。	山田 太郎	山田 太郎
〇〇期(〇〇年3月卒)	※期あるいは卒業年月を記入ください。		
00000@00000.00	※お使いでしたら、e-Mail IDを記入ください。		
000-0000			
東京都〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇			
山田 太郎			
03-0000-0000			

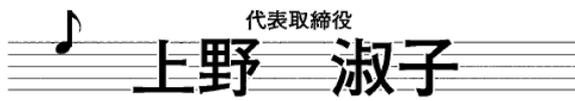
関東に居住予定の卒業生の皆様へ／事務局より

東京潮陵樽中会では、新会員を募っています。進学、就職等で小樽を離れて関東地区に居住される卒業生の皆様には、是非、ご入会頂きたく、ごお願い申し上げます。E-mail (info@choryo.org)にて事務局宛に入会のご連絡をお願いします。

また、本年6月6日(土)14時～17時に、東京都中央区銀座プロッサムにて、定時総会・新会員歓迎会を開催します。新会員の皆様を大歓迎する会ですので、是非、ご参加ください。詳細は、3月にホームページに掲載します。皆様のご参加をお待ちしています。

役員・幹事

役職	名前	卒業期	役職	名前	卒業期	役職	名前	卒業期
会長	今日出夫	全67期	幹事	金栄 紘夫	全53期	常任幹事	工藤 優彦	全67期
副会長	岸田 仁	全67期	常任幹事	大浦 辰次郎	全54期	常任幹事	青柳 裕子	全71期
副会長	山下 眞毅	全73期	幹事	永野 茂	全54期	常任幹事	広田 直行	全72期
副会長	柳原 文	全82期	幹事	間 利弘	全58期	常任幹事	山下 眞毅	全73期
監事	佐竹 茂市郎	全63期	幹事	稲澤 君夫	全58期	常任幹事	清水 俊之	全73期
顧問	佐々島 宏	全65期	常任幹事	東口 豊	全59期	常任幹事	和田 一男	全74期
事務局長	南澤 孝夫	全65期	幹事	柳田 眞典	全60期	幹事	飯田 恵之	全77期
事務局次長	近藤 寛希	全65期	常任幹事	高橋 昭	全61期	幹事	織田 めぐみ	全79期
事務局次長	南澤 良夫	全67期	常任幹事	武田 立	全62期	(連絡係)	鈴木 幸子	全81期
事務局次長	嶺野 恵	全73期	幹事	前野 一夫	全62期	常任幹事	小木曾 晃貴子	全82期
幹事	島 雄一	全46期	常任幹事	橋本 明久	全64期	常任幹事	梅津 里織	全82期
常任幹事	上野 淑子	全47期	常任幹事	苫 孝二	定64期	常任幹事	佐々木 文雄	全85期
幹事	増田 裕二	全48期	常任幹事	滝沢 純	全65期	常任幹事	宮野 人至	全86期
幹事	笹子 郁夫	全49期	常任幹事	南澤 孝夫	全65期	常任幹事	小葉松 知行	全90期
(連絡係)	蛸島 義弘	全50期	常任幹事	山崎 信行	全66期	常任幹事	小島 綾乃	全90期
常任幹事	上諏訪 一明	全51期	常任幹事	館山 恵子	全66期	幹事	村上 文一	全99期

有限会社 チカラビル
 有限会社 栄伸企画
 代表取締役

上野 淑子
 (47期)
 東京都千代田区神田小川町1-7
 横浜市港北区篠原北2-13-12
 TEL/FAX 045-421-6121


 BRAINPARTNER
 事業成長を支援するコンサルティング会社
 (経営計画作成、営業力強化、人材育成、人事制度構築)
株式会社ブレインパートナー
 代表取締役 **和田一男** (74期)
 東京都渋谷区宇田川町6-20 パークアクセス渋谷神南12階
 TEL 03-6325-1715
 mailto:wada@brainpartner.co.jp
 http://www.brainpartner.co.jp/


北海道小樽潮陵高等学校
 関東地区同窓会
東京潮陵樽中会
 mail: info@choryo.org
 http://www.choryo.org
 事務局: 浦安市日の出1-3-22-406 南澤 孝夫 方
 TEL: 080-5498-8305

発行日 令和2年3月 発行人 東京潮陵樽中会 今日出夫(67期) 編集人 南澤 孝夫(65期)